エト2Y-54
特21
914

恩禿悲歎述懷和讃説教目次 上卷

第一席……一頁
○恩師に三通りある事
○正三禪師と板倉周防の守
○恩禿の御名に五義
○一に本願の正意を示す
○聖道門と淨土門の目當
○二に信機の法を示す
○灸と黒皮の喩
第二席……十一頁
○三に深信を示す
○聞信歸命の御謂れ
○四に世間の制戒に順ず
○五に疑惑を解かんが爲め
第三席……十五頁
○悲歎述懷の四字
○悲歎には相手がある
○西行は月、小町は花が相手
○吾々が迷の有樣
○我人一番嫌ひのもの三
○世界の事物を知る三量
○十界を知るの三理法
第四席……二十四頁

明治
1 12 2
交内

○祖師聖人四つの御悲歎
○一に機を信せるの悲歎
○二に法を信せるの悲歎
○三に現世を祈るの悲歎
○四に末世三寶を輕する悲歎
○人間は貿易の動物

第五席……三十頁

○智慧ありて信仰なき人
○信仰ありて智慧なき人
○迷悟の差別は何より現れる
○一のうどん粉種々に變化の喩
○眞空無相、鏡の喩

第六席……三十九頁

○佛性は眞如の理體なるか
○因緣は眞理の外か内か
○過現未の三世を辯ず
○本具の十界、差別と平等

第七席……四十六頁

○楞迦經の懸記の御文
○有無二見の譬喩
○善惡因果の道理
○都の御客に御馳走二ツ

第八席……五十四頁

○此に生れ彼こに死す
○在五中將と貞柳の歌
○母を奥山に捨る因緣

○親の御恩を忘れなよ

第九席……六十頁

○淨土門信受に就ての悲歎
○水晶で日光を取る喩
○月に向ふと背くの喩
○魚鳥水風に逆ふ喩
○凡夫の心は鷹物

第十席……六十六頁

○有漏と無漏の眞實
○寐ぼけ先生の辭世の句
○はの字のてには三通り
○一に手爾葉のは。
○二に簡別のは。
○三に不同のは。

第十一席……七十二頁

○性根玉でも何の玉でもの句
○凡夫の心は末とげぬ
○かの疑が墮獄の根本
○無形の心を何して貫ふ
○智識交換の譬喩

第十二席……八十頁

○眞俗二諦ランプの喩
○王法佛法は密着の關係
○名號六字に七科の別德
○食物消化の喩

第十三席……八十六頁

○心に二種の差別を說く
○一に絕對心、萬有の本體
○二に相對心、差別の心
○有るも無きも心の分別
○果の體は物と心の二ッ
○恒星と遊星並に慧星の話
○成住壞空と衆生業力

第十四席……九十六頁

○心とはどんなものか
○俱舍の心王と心所五十二種
○唯識の五十九種の心
○信仰を心の主とせよ

第十五席……百〇一頁

○虛假不實、虫喰栗の喩
○娑婆の虛くらべ
○子路闇室に冠を正す
○子供に物を食はす喩

第十六席……百〇九頁

○句をば問れて困る作花
○三不三信の辨
○床飾りの自然木の喩
○法施と財施の二種

第十七席……百十六頁

○布施婆羅蜜の細辨
○梅室庵の俳句
○夜の寢ざめに郭公の句

第十八席……百二十二頁

○聞に三種の器ある事
○覆器、漏器、穢器
○源平古道首の目さゝ

第十九席……百二十七頁

○外儀のすがたの辨
○杭州の橙買りの話
○聞其名號の御謂
○南洋のタヒンチ島

第二十席……百三十四頁

○山高きが故に貴からず
○長吉の親切下女の禮
○心識發働の六根
○生滅門と不變門の二つ
○三世因果相續の理

第二十一席……百四十三頁

○女人諸佛の慈悲に漏る三義
○一には佛法の非器
○二には女人の自障
○三には女人の障他
○開敷蓮と逆蓮華
○薪と火の因緣の喩

第二十二席……百五十頁

○變成男子は此土の益か
○法性寺の俊寛物語
○菩薩に四種の德あり

○一に不動偏至の德
○二に一念偏至の德
○三に無前無後の德
○四に示法如佛の德
第二十三席……百五十七頁
○賢善精進の解
○信玄は一生論語を手にせず
○貪瞋邪僞、姑と嫁の競ひ
○奸詐もゝはしの解
○六人の中盜人を見出す頓智
第二十四席……百六十五頁
○威儀作法に自力と他力
○威儀をつくらふ二種

○一に自力散善の人
○二に信心獲得後の人
○つゝめども身に顯る例
第二十五席……百七十一頁
○積聚の性と不改の性の二種
○さらにやめがたき三義
○横超と竪超竹節の喩
○梅干を握て壺を破る喩
第二十六席……百七十九頁
○惡性と三毒の煩惱
○日野大納言欄干の話
○土地の德で煩惱を滅する喩
○勘當と三界流浪の喩
第二十七席……百八十五頁
○心は蛇蝎の如くなり
○當流では聞卽信
○聞と信とは別物でない
○貪瞋二河の譬喩
第二十八席……百九十三頁
○修善も雜毒なる理由
○雜毒に二樣ある事
○一に毒器に甘露を入る喩
○二に食物に砂の雜る喩
○道舜法師の授戒

愚禿悲歎述懷和讃說教 上

讃岐　宮本諦順述

第一席

偖て御當地は佛教繁榮の地と兼て承る、去乍拙僧は此度初て招聘に預り、今日より愚禿悲歎述懷和讃を御讃題にそなへて、席を重ね座をヒめて御取次に及ぶお心算ですから、何卒大切をかけて御聽聞下されよ。題は「一部の總標」と申して極大切なものぢや、あの學校の旗の如きもので、旗の印を能く見れば何學校と云ふことが知れますぞ。此十六首の和讃の旗印は、愚禿悲歎述懷和讃、是を能く解して見れば、如何なることを御示なされてあると云ことが大樣分ります。先づ愚禿と云ふは祖師御自身を御指なされた卑謙の御言と云ふて御自

身をへり下りたこと、愚はおろかと訓ド無智の義、造悪の義で祖師の御心に約しまして、此親鸞はおろかしい何も辨への有るものではないと云ふが愚の字の意。さて禿は祖師の御形に約し、越後の配所に御座る間は、上を敬ひ玉ひて御髪も剃り玉はぬゆへ、僧に非ず然れども御身は還俗もし玉はねば俗にも非ず、僧とも俗とも名の付けられぬと云が禿の字のこゝろである。今御安心門で伺へば、たとひ心は鬼なりとも形相はいかやうなりとも、己が手元を論せず、唯雑行捨てゝ本願をたのみ奉れば、心によらず形によらず誓願不思議の働きにて、往生を遂げるぞと云ふことを御知らせ下されたが愚禿と云御名ぢやぞ。依て御本書にも「非僧非俗是故以禿字爲姓」との玉ふて有る。愚と云ふは愚痴のことで、愚痴にも性愚痴と、思惟愚痴と、還愚痴との三通りありますが、今祖師の愚痴は還愚痴のこ

とぢや。深智博覽の高き御德をそなふとも、自力をはなれて只我身は罪深き淺間敷ものなり、かゝる徒者を御助け下さる本願よと、愚痴に還りて本願を信ド玉ひたのぢや。禿の字は字典に「髪不纖長貌」と註して有て、和訓ではかむろと讀む、六七歳の子供の髪のもとゆいにもかゝらぬ亂髪を俗にかむろと云ふ。こゝを嘆德文には「是則ち竊に末世凡夫の行狀を示し、專ら下根往生の實機を表する者をや」と、あゝ今時の渡世のために頭を剃りたる、鉢禪門の如き有樣なりと云思召で、愚禿と御名のりなされた、依て下の讃に「是非しらぬ邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども名利に人師を好むなり」と仰せられた。兎角他力にすがるには、我身は愚痴の徒者とへり下らねば、本願の御謂がしみ〳〵と貴はれぬ、無理にへり下るのではない、御本願の廣大尊高なるに向へば、自ら頭

の上る所はないのである。

あの驢鞍橋と云古き書物を見れば、昔し板倉周防の守京の所司代と町奉行を兼務なされた時の御觸れに、若し町内に迷子が有る時は、親の元より尋て來るまで隨分大切にして、其所におくべしと御觸なされたれば。其時京都に正三と云禪僧の大德が有たが、此正三と周防の守とは至て親密に有つた。正三禪師の申すには此度の御觸は宜敷御座りますれども、御上にも迷子をそれほどに大切に思召さば、迷子があらば早速に役所へ連て行き、親の方にも子を失ふたらば、うろ〳〵外を尋ねづと役所へ申上よ、直に役所にて相渡そうと有れば、町内にも世話のなきやうな近道ではあるまひかと存ずと申上たれば、周防の守横手を打て、さて〳〵佛法の智慧は各別なものぢや成程其に致さんと、右の觸れを直されたとある。どうぢや各々方分

りませうか、證りの道をうろ〳〵尋ね廻らんより、身も心も愚となり誤り果て〻、彌陀弘誓佛智不思議の御役所へ、御助け候へと出るが否や、眞實報土の親里へ、攝取心光の乳房を付け、諸佛護念の守りを添へ、送り屆けて下さるが御本願の御手柄ぢや。

さて此愚禿と云御名を、御安心の上で伺ひ奉れば五つの義が有る。一には本願の正義を示す、二には信機の法を示す、三には深信を示す、四には世間の制戒に順ずる、五には疑惑を解んが爲めと云ふ五義が有る。初に本願の正義を示すと云ふは、阿彌陀如來の御本願の御目當は、修行の出來ぬ戒行のならぬ腰拔の吾等、是を選擇集には「本爲凡夫兼爲聖人」との玉ひ、御和讃にも「如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をは成就せり」と有て、彌陀の本願は智者や學者のためではなひ、愚

痴の凡夫が淨土の正客、聖道門では少でも智慧の有るものが證りの本となるけれども、淨土門では愚痴にして佛智にすがるが往生の本となるぞや。恰も印度の一部又は濠洲の土人などは、色のなるべく黑い方が美人と見る、先年歐羅巴人が其地へ行きましたら、土人の或る女は其顏を見て化物が來たと逃げ出した、そして本人の顏は炭團に目口を書た如くです、それが彼地で評判の美人ぢやそうな、顏の色をくらぶるには、此地では少しでも黑ひが勝となる。聖道門の色くらべならば、智慧の色の白ひが勝なれども、淨土門では色の黑き愚痴の凡夫が御目當ゆへ、少でも智慧を加へては眞實報土の往生は出來ませぬぞ、そこで祖師聖人は本願の實機を顯して愚禿と御名のりなされた、是れ聖道門と淨土門とは目的が違ふ。たとへば祭禮などの時、衣裝着かざりて美々しき中へ、一人破れつゞれにちぎれ

帶をして居れば、慈悲の心有る人の目には、美々しく着飾りし人よりは、つゝれきた人に目が一番に付くで有ふ。なぜなれば大勢が此樣に着飾りて居る中へ、ほんに能々不自由なればこそつゞれを着てさぞ悲しからふと目が付くで有ふ。今も十方衆生何れも未來の晴れの場には、聲聞緣覺菩薩と云樣な曆々は、四諦十六行相六度萬行十波羅蜜の晴衣裝を着飾り、我も〳〵と磨き立、出世の門に望めども今日我人は惡業煩惱のつゞれに、妄念妄執の亂髮、無始無明の垢の付きたる有樣を、大慈大悲の阿彌陀如來の御目から御覽なされてはやれ不便やいたはしや、あの儘では置くまひ、三十二相相好圓滿の身に仕立、蓮華の御座でにつこりと笑ふ顏が見たひとて、惡人凡夫のために御本願を成就したからは、曾無一善の婆々かゝが本願の御目當ぢやはどに、繕ひ立ては如來の御意には叶はぬはどにと、御自

身から愚禿と御名のりなされ、本願の正義を顯して往生の先達となり玉ひた。

二に信機の法を示すと云ふは、善導大師が「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に沒し常に流轉して、出離の緣有ることなしと深く信ずべし」と、御手本を出し玉ふゆへに、蓮如上人は「我身は惡き徒者と思ひつめて」と仰せられた。兎角我身を見限り果ねば御本願が信ぜられぬ。弓をひくものは力一ぱい引きつめ切て放たぬば、向へあたりはかひない、鐘をつくにも撞木を力一ぱい引けば、でーんと當りが強ひ。今も助くる緣も手掛も盡きた此身と見限り果てゝ、かゝる徒者を助け玉へる御佛は、阿彌陀如來ばかりぞと本願にすがらねば、本願の實意は得られぬ。我はよひものぢやと思ては、御本願が有難貴はれぬ、且又御恩もしみ〳〵と喜ばれぬ、

それゆへ大經には「謙敬聞奉行」と說せられて、謙はへり下ると云字で、吾身は地獄一定の身とへり下りて聞くと、御慈悲も有難く受けたる御恩も自ら思ひ知らるゝ。併し深く信ずるとあればとて、淺ひ心を深くせんと我機をせむることではなひ、廣大深々の御法を聞くことぢや。源信和尙は「信心淺けれども本願深きがゆへに往生疑ひなし」と仰せられたぞや。たとへば灸を度々すへる時は黑皮が出來る、其上へすへると根からあつくない、其黑皮をのけてすへると隨分こたへる。今も其如くそれも合點でれも承知と、聞分け知り覺へて法義に皮が出來ると、毎坐聽聞しても有難くはないほどに、我知り立て覺へての黑皮を取て、煩惱具足の赤はだへ、かゝるものまで御助けの御本願、やれ有難やと聽聞すれば、どの樣な說敎でも飛立ほどに難有なるぞ。それゆへ御祖師は愚禿と御名のりなされ、さ

あ其方も愚禿の心になりて、へり下りて御本願を信せよと、御自身の御身にかけて御教化なされたのぢや、各々も彌我機をひきさげて廣大の御本願を信せられるが何より仕合。

第二席

偖て前席に於て愚禿と云ふに、五つの義有る中第二まで辨しましたが、三には深信を示すと云ふは、疑晴れて深く信ずれば、いよ〳〵大悲の程が思ひ知られ、我身の淺ひことが能く知らるゝものぢや。今各や我等如き五逆十惡具諸不善、應墮惡道の徒者に、深信ぢやの金剛心が起らふ筈はなひぞ、こゝを最要抄には「往生程の一大事やお れ安き凡情を以て治定すべきにあらず」と仰る「道ならぬ奇妙不思議を好むこそ化物になるしるしなりけり」此心中を繕ふて深くもならふ、丈夫にせふと力味だとて、下度雁が飛ぶとて石龜の地段陀と

云ふ如く、なしとげることは出來ぬぞや。依て又最要鈔には「凡夫のまことのこゝろとおぼしきは、一念起すに似たれども全く末とはらず、然れば光明寺の御釋にも、たとひ清心をおこすと云へども、水に畫けるが如し」とみへたり、一願起した覺へもなければ、一行勵んだためしもなし、無願無行、白地底下の泥凡夫、我かしこくて信ずるに非ず。聞其名號と云ふ聞は、善知識にあひて如來の他力を以て、往生治定すべき道理を聞き定むるの聞なり。其名號の謂れとはどう云ふ由け、南無はたのむ機阿彌陀佛は助ける法、心配するな助くるぞすくふぞよが助かる理、參らすぞよが參れる謂れ、此御謂を聞きひらくばかり、其謂れをどう聞き開きます、參らすぞよで參らせ玉へ、助けるぞよ御助け候へと、露塵程も我はからひを雜へざれば、攝められぬものが攝められ、助けられぬものが助けられ、救

はれぬものが救はれる、こゝが聞信歸命の御謂ぢや。かるがゆへに如來の願力を以て、往生治定せしめ玉ふ道理を、聞き開く信の領解の一念で、早や行せずの行人となり、願ぜずの願人となる、あら嬉しや勿體なや、等覺補處の彌勒菩薩に先達つて、誠の信心得る人は此度證を開くべし、此に居乍ら極樂の聖衆の御仲間入に召しなし下さるとは、ほんに今まで知らなんだ、鳥なき里の蝙蝠で物知り、發明ものぢやと思て居たに、今廣大な御慈悲にあひ奉つて見れば、さても誤り果た我身の上、此本願なくんば何れの世にか迷を離れん、かゝる身ながら助け玉ふ御本願ぞと、思へば自慢我慢の心も和ぎ、自ら我身を謙りて、愚禿の心になりて御恩を重ド敬ひ奉れと云ことを、御祖師が自ら愚禿と御名のりなされたぞや。

四には世間の制戒に順するがゆへに、祖師聖人三十五歳にして、越

後の國府へ配流せられて、五ケ年の間は上を敬ひ、藤井の善信と云ふ罪名を賜はるゆへ、御髪も剃り玉はず。然るに五年ぶりに勅免を蒙り玉ひた、此時御受けの證文に、愚禿と書て　陛下へ奏聞なされたれば　陛下叡感を下だし、侍臣大に褒美すと、天子を初め關白以下の公卿達まで、終りを愼むこと始めの如しと、王法佛法の制禁を破らざる御祖師の御心を奬美し玉ひたとある。依て蓮如樣は「表には王法を以て本とし、內心には他力の信心をふかく貯へて」との玉のも此の心ぢや。然るに近年は道俗ともに我もの知り貌に人を侮り又は我程法義者は外にはなひと、のさばりかへつて身を高ぶり、王法を守らざるは、祖師聖人の愚禿と名のり玉ふ御心を、水の泡にするも同全勿體ないことではないか、內心に他力の信心を貯へ、外相には其色を出さぬ樣に夜の寢覺にも、御祖師の愚禿と名のりて王法

を守り玉ふことを手本とし、法義を美く相續したひものでは御座らぬか。

五に疑惑を解かんが爲めとは、世間の人達がかゝる愚痴なるものは云何と、卑下して本願を信せぬものが有るゆへ、御祖師は是を大に歎き玉ひて我機樣に迷て佛智不思議を信せざるものゝために、御自身から愚禿と名のり、愚痴の凡夫となりて、かゝるものを本と助け玉ふ本願ぞと、我等が往生の手本となりて、疑を晴して下されたぞ歸命本願抄には「智者の往生せぬもあり、愚者の往生するもあり、知ると知らざるには非ず、賴むと賴まざるとにあり」と、御和讃には「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障をもしとなげかざれ、願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず、佛智無邊にましませば、散亂放逸もすてられず」

さあ愚痴なが往生の障りにはならぬ。本願をたのめば、智慧光が代りて攝すと有て、知らひでかなはぬことなれば、本願の御手元に能く知召し、覺へねばならぬことは南無阿彌陀佛よく覺へて有るからは、我等が手元はたのむばかりでよきやうに、本願にはからわせ玉ふ然れは行者の方には兎や角と計らはず、たのめば助かると聞て疑なく、一心に本願に歸命し奉り、かゝるものをこのまゝで御助けにあづかる、大悲の深重なることを存ずなば、只何の中からも廣大雨山の御大恩打仰ひでは南無阿彌陀佛〳〵。

第三席

偖て昨日より辯ずかけたる題號、愚禿と云御名に五義を擧げて御話に及んだが、今日は悲歎述懷の四字を說きませふ。昨日も云ふ如く題は一部の總標で大切なもの、字書に「題は額なり」と註して額はひ

たいのこと、此愚禿悲歎述懐と云ふ題號は、十六首の讃のひたいで有ります。仍て十六首に御祖師のぞつこんの思召を、題號へ打出玉ひたれば、今日は千坐に一坐の大切なる御法義ぢや程に、各にも心を靜めて聽聞致そうぞや。悲歎述懐と云ふは、悲は悲泣と續いて、説文には「心に非ずしてしたがふ」と註して、心に非ずと云ふて我思ふ通りにならず、心に可はぬを悲と云、悲と云文字は鳥の羽を右左へやり違て立せた形ちや。然れば心に思ふことが間違ふて、我思ふまゝ自由ならぬを痛みかなしむのぢや、依て悲の字をかなしむと和訓してあります。是れは金璧の和訓で、金は決斷して違はぬものゆへ、丈夫なことを金鐵ぢやと云ひます、璧は縮なりと有りて縮むことぢや、然れば。かなしむと云ふは、思ふまゝならぬ心もちゞみあがりて心の皺が延ぬこと。淮南子と云ふ書物には「憂悲常に來れば病

終に積む」と有て、思ふまゝにならぬこと度々重なると、病も積かさんで重くなる。善光寺の如來樣は「まちかねてうらむと告よ皆人にいつをいつとて急がざるらん」今も我等衆生の信心の定らぬを悲み玉ひて、終に御心はのんびりと安心ならぬゆへ、御慈悲の御胸のかたまりとけぬを悲むと云ふ味ひぢや。次に歎は禮記に註して「吟息なり」と有て、心のまゝにならぬことが積り〳〵て、心にしみわたりて聲に出るを歎と云ふ。又説文には大息なりとある、此時はためいきつくと云ふことで、胸に思ひの滿たとき出る息をためいきと云、是は心にあまりたのぢや。丁度盥の水が一杯みつれば外へ流出るであらう、歎は和訓ではなげきと云ふ、なげきくどくを畧してなげきと云ふ、然れば悲歎と云ふは、御心の内の歎き悲み、思ひ餘りて大息をつき聲に出て玉ふことぢや。

全體悲歎には總てて相手が有るもの「つく〳〵と消ゆる空こそ悲けれあすもきくべき鐘の聲かな」これは無常が相手、西行が「歎けとて月やは物を思はするかこちがはなる我涙かな」と詠ずたは、月が相手となりて歎かしたのぢや、小野の小町が歌にも「花の色は移りにけりないたつらに我身世にふるながめせしまに」とは花が相手となりて泣したのぢや「泣くは我涙の種は向から」と云ふ如く、悲歎には必ず相手が有るぞや。今祖師聖人思に餘りて、十六首の和讃へ擧て悲歎なされた、其悲歎の相手は誰ぢやと云ふに、外にはないぞ各々我等が相手となりて御歎きなされたわい。今は其の紅ひの御涙が積り積りて、我等が心中に流入り、稱禮念の働きとなり、金剛堅固の御領解にもとづく身となられるのぢや。さあ聞きましよぞ善導大師は「唯恨衆生疑不疑淨土對面不相忤」と印せられ、法苑

珠林には「凡人所信唯耳與目自此之外咸致疑」とあれば、我等が身は迷の境界、それゆへ見さること聞かさることは疑ふ、其迷とは何をか云ひますか、其の迷とは眞理に昧き是を迷と云ふ、眞理に明かなる是を悟と云ふ。凡そ佛教の中に此迷と悟との境界を分けまして十通りと致します、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛、是を十界と云ひます、此中前の六つは紛もなき迷で、後の佛界はきつぱりとした悟であります、聲聞と緣覺と菩薩との三は、何れも眞理の幾分かを悟り玉ひたるゆへ、前の六つに對しますれば悟と云ふけれども、其の悟りまた十分になきゆへ、是を佛界に比べますと猶迷であります。今吾々が迷の有樣は衣食ありて飢寒を支へ、家屋ありて雨露をしのぎ、月をながめ花を見る如く、色々の樂みが有り、そして感覺も知識も備へ、萬物の長とまで

云はれ、最もたのしむ樣でありますが、一歩進で考へて見れば、實に不明了なものぢや。大經には「不知生所從來死所趣向」と說せられ、吾人は何の必用有て此世界に生れましたか、又何故に死なねばならぬ、父さんや母さんは我を生みたるも、其利解を知らず、各や我々は自ら死ぬるも其所以をも知らず、徒らに月日を送りまして、つまり其目的は知らず。又眼をぎろづかしてあたりを見れば、それそこに鳥や獸草や木や色々あり、人間の中にも貧富貴賤とか、智愚壽夭種々樣々に差別があり、上を見れば天あり下を見れば地あり、向ふを眺むれば山やら川やら澤山なことでしやうが、眼に見たり耳に聞たり、鼻にかぎ舌に嘗め、此理をやうと推してみれば、一も其理を知らず。我々が身體は廣い空間の中に僅に四五尺、其壽命はと云へばいつまでと云ふはてなき時間のあひだに五十年か六十年

こゝを遺教經の中には「此是應捨罪惡物假名爲身沒在老病生死大海」と說せられた。今我人が一番嫌ひなものが三つある、それは何ぢや老病死是ばかりは嫌ひでしやうが、現今は博物究理の道も開け、珍しい器械も出來目覺しい新發明も樣々にして、衛生も醫術も進みたれども、こればかりは除くことは出來ぬでないか。父母に分れ妻子に別れ、悲哀の聲は聞くも嫌であらう、然れどもどうも仕方がない、こゝらで此の世界を娑婆卽ち忍土と云ふのであらふ。古人は「人間一生は一醉の夢、漕ぎ行く舟の跡の白波」、是が迷の境界ぢや。今世間の人達は十界の中、人間と畜生とは現に眼に見るゆへに知るが、後の八界は眼にふれざるゆへ大に疑ふ、それゆへ僧侶たる我々をのゝしり、地獄餓鬼など云ふは、勸善懲惡のために設けたものの實はなきとか、只人を恐怖させて金錢を貪り、己が渡世のた

めとか色々申すものが有る。

凡そ世界の事物を知るには、現量比量聖教量ありて、現量とは親く實見することにて、火を見て火と知る如くで、現在の所で決することと、比量とは道理より推し究むること、烟を見れば火の有ることを知る如く、此世の因果違はぬに依て、未來の因果違はぬことを知る聖教量とは聖人の確言に依ること、虚妄のない人の語は證據となる如く、釋尊の經説が證據となる、是等に依て分明にしることを得る然るに我人は五官に限りなき作用と自由の勢あるならば、地獄も見べし極樂も見べしと雖も不自由にて自ら迷の境界にありながら迷と云ことを知らず、されば十界あることを知るには、どう云理を以て知りますかと云ふに、三つの理法によりて知れます。第一に世界及び動物無數の理、第二に原因結果の理、第三に智德進退の理、是等を以

てよく知れますぞ。然れば各々や我々の肉眼では、未來極樂は見ぬけれども、見ぬでないとは云はれまい釋尊、廣くは一代經近くは淨土の三部經、恢廓廣大超勝獨妙の御淨土の有樣を述べ玉ひ、其淨土へは阿彌陀如來をたのめば、何の造作もなく參らるゝことを、御説なされた金言を聽聞しながら、疑ふとはあんまりぢやないか「貞女たてたり操もしたりそれで夫に疑はれどこで立つのぢやわしが身は」「願も立てたり修行もしたり夫れを衆生に疑はれどこで立つのぢや彌陀が身は」さればこそ善導大師の御言「唯恨衆生疑不疑」との玉ふ、此中恨みと云ふものは、親みより起るものぢや、依て善導大師は紛れもなき彌陀の化身、是を元祖法然聖人は、選擇集には「此疏是彌陀直説何況大唐相傳云善導是彌陀化身」と御意なされた、疑ふまいぞ如來の金言、器量が有れば觀念せよ、爰に居

ながらおがまるゝ。界外無漏の淨土へは凡夫の力で往くのぢやない、無疑無慮乘彼願力定得往生、彌陀大悲の願船は乘せて必ず渡しける乘せるも他力渡すも他力、造作苦勞は彼方にさせて、樂は此身が丸貰、勿體ないと知られなば御恩の稱名喜び擧げては。

第四席

偖て引續て御相談に及ぶ、前席に於て悲歎の二字は辯ずましたが、次に述懷と云ふは、おもひをのぶると云ふことで、おもひの字數々有りますれども、今此の述懷の本訓は思ふ念なりと註して、念は粘なりと有てそくいのこと、そくいと云ふものがひつゝきもつれつきするものゝ、つけばはなれぬものぢや。然れば述懷と云ふはむねに思ひのひゝつき、離れぬを述ぶるを述懷と云ふ、懷は和訓にくよくよと云、胸につゝむ思ひの自ら言に顯れたるを述懷と云ふ、是は術

なさの獨りごと、俗に問はず語りのことぢや。思より出るとも云ひ包めども隱せども胸にひつき離れぬ思ひが有れば、其方は何ぞ苦になることが御座るか、それはどうして分るか、それは君の顏色が靑ひぞやと云如く、今御祖師の胸にはなれぬ思ひを、自ら獨りごと問はず語りをし玉ふが、此十六首の御和讃ぢや。然れば此に一つの不審が有る、御祖師は何を苦になされて、其樣に獨り言遊ばすぞと云ふに、されば此御和讃の表面を窺ひ見るに、總て四つの御歎きが有る。初に機を信せざることを悲歎なさる、是が初の三首「淨土眞宗に歸すれども乃至清淨の心もさらになし。外儀のすがたはひとごとに乃至奸詐もゝはし身にみてり。惡性さらにやめがたし乃至虛假の行とぞなづけたる」この三首は機を信せざることを悲歎し玉へるなり。二に法を信せざることを悲歎し玉ふ、是に三首「無慚無愧のこのみにて

乃至無慚無愧にてはてぞせん」この三首は法を信せぬことを悲歎し玉ふ御意ぢや。三に現世を祈ることを悲歎し玉ふ是に二首「五濁増のしるしには乃至卜占祭祀つとめとす」此二首が現世を祈ることを悲歎なされた御和讃ぢや。四に末世の顚倒三寶を輕することを悲歎す是に八首、僧ぞ法師のそのみなはと云より終りの句までは、末世の顚倒三寶を輕ずることを悲歎なされた。依て奥書に「已上十六首は愚禿が悲み歎きにして述懐としたり、此世の本寺本山いみぢき僧とまうすものうきことなり」と御意なされた。然れば御流をくむ面々は聖人樣とは敵ではあるまじが、それに聖人へためいきつかせ、物思ひさせまして知らぬ貌して、うか〳〵と機をへり下らず法をも信ずる心もなく、そりやと云へば現世祈りに飛びまはる、それで御門徒と云はるゝか、百圓か二百圓の志を持て來たれば、院主の爲めには結構

な門徒ぢやと思はしやるか知らんが、聖人はそれをよひ門徒ぢやと御喜びはなされぬ、信心決定して聖人の御胸をやすめ奉らねば、御門徒とは云はれぬわい。唯機を信せずして憍慢の心も高く、法をも信せずして邪見をつのり、夢の浮世に迷て現世を祈り三寶を輕しめ亦もめずらしからぬ三惡道へ落るなら、祖師の御胸に毒の矢を射るも同全ぢや。

祖師はこの四つが苦になりて、御安堵の思ひなく、關東北國二十五ケ年、荒血の山にゆきつかれ、草鞋の食ひめからたら〳〵と、流るゝ血汐に雪が眞赤に染んだとあるぞや。衣のすそはいばらに破れ、菅笠竹杖の難行、苦行ハ谷の水音松ふく嵐、只さへものすごき越後路に御身を置き玉ふに、邪見無法の土地なれば、御宿致す者もなくこゝの辻堂かしこの拜殿に一夜をあかし、人の軒端にたゝずみ玉ひ

たとひ家に御座るとも竹の柱に茅の屋根、藤原氏の若君が壁の代りに莚でかこひ、垢にそまりた白無垢で御休みなされ、日野左衛門が軒の下、石を枕に雪の中「寒くとも」たもとに入れよ西の風彌陀の國から吹くと思へば」と稱名念佛しながら一夜を御明なされたことも有る、此御苦勞は誰がさせたぞ、我々が心にひかれての御難氣ぢやわい、各御跡をしたふて參らせて貰ひましよぞ「子の足の白きは親の黒きかな」大悲の彌陀が衆生にかはり、五劫永劫の其間、難作能作の御苦勞で積苦累德、善根功德の有丈を積み收め勤め入れ、正覺成就の曉には、さあ凡夫が佛になれる謂れは成就したはぞに、出來た功德のかたまりを、發願回向と熨斗をつけ、令諸衆生功德成就と、與へるぞよと仰しやるが彌陀如來樣ぢやぞ。曇鸞大師は「以己功德回施一切衆生」と仰る、己が功德とあれば、行者所修の功德

の樣に見ゆれども、全く行者の功德ではない、阿彌陀如來より廻向し玉へる南無阿彌陀佛、此南無阿彌陀佛の中にある往還二種の廻向ぢや。南無阿彌陀佛の廻向の、恩德廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり。有る學者が人間をば貿易の動物だと云たが、成程人間は貿易の術を知て居ても、畜生は此術は知らない「半錢の笛で按摩の摑み取り」是よりむさいは彌陀と衆生の貿易はもうけて損する怪我がない、こゝを蓮如樣は「人の辛勞せずして德をとる上品は彌陀をたのんで佛になるにすぎたることなし」と彌陀の廻向成就して、往相還相ふたつなり、これらの廻向によりてこそ、心行ともにゆしむなれ、丸の裸の其儘で功德善根の主となるは、本願他力の御不思議ぢや。かゝる御慈悲を信ドたか、信ぜられてあるならば其時こそ聖人の御胸の思ひもとけるで有らう、若し左なくば

無量永劫聖人の御胸も思ひにふさがり心もちゞみ上り泣きくどきて御座遊ばすで有うほどに、早くもとくも信心領解して佛恩を思ひやられよ。

第五席

偖て今日は大分賑々敷參詣を遂げられ、見佛聞法の勝縁に逢ひ奉るは、其身々々の仕合此上もなき次第であります、されば何方も心を靜めて御聽聞さつしやれ、折角御法縁に遇ひながら、實効がなくては何の所詮はない。讃題にそなへました十六首は、御祖師の御心にくよ〳〵と御歎き悲み玉ふ有樣であります、其歎き悲み玉ふは外ではない、今日の如く大勢參集の中には、智慧が進で信仰の足らぬ人も有う、智慧が進むとは通常の坊主所でない、充分道理を知りた人のこと、信仰の足らぬ人とは道理は充分知りながら、未だ我靈魂の

歸着が明かになつてない人、是が信仰の足らぬのであります。今智慧と信仰と二つ揃て有る同行なら、眞宗の上等信者の内ぢやが、唯今までの信者と云ふも多く信仰が有ても智慧が少い。よりて貴殿は何故佛法を信仰しなさるかいといへば、そりや地獄がこはいゆへ、其地獄へは何で行くかい、もうそんなに責めいで宜敷からう、いや〳〵充分尋ねば其理が分らん、それはなぜかと云へば惡いことするから、何が惡い其樣に己はそれから向ふは分らん〳〵など云鹽梅で道理々屈は分らぬけれど信仰はゐらいもの、眞宗の同行は大方こゝら邊で信者と云ふたら、馬鹿の代名となりてありますけれども、御祖師の御心には智慧が開けて信仰のない人よりは、信仰者の方が能くかなひます。何なれば信仰者の方は迷を轉ずることが出來る、理屈ばかりの同行が多ひと御悲歎なされ、信仰者が出來ると大に喜び玉

ふ、こゝを智目行足と智慧の眼は開けても、實の行がなくては片輪の繁殖を好むと云ふ道理で、あの天神樣の脇差はさしずめで而も中實がなひ、智慧は智慧でよけれども小理屈の鞘だけでは、敵をきることはなりませぬ。今信仰の中實がなくては煩惱の障をきりのけて御證の境界へ到らせて貰ふことはなりませぬ。此本堂に參詣なされた上は成佛得道の積りで有ふ、乍去今日は日曜のことにて、諸學校の生徒の面々が多ひゆへ、初めから眞宗の安心を御話致しては中々合點がゆくまひと思ふ、それゆへ佛敎の道理上より辯ずるから、婆さんや爺さん達は今日一日だけ幸抱して聞て下され、併し佛敎の道理を御話すると一朝一夕ではとても一分も出來ません、其一分を聞て誤りては大變ぢやぞ、されば悟と云ふ邊より御話をするから、何れも靜に聽聞せられませふぞや。

全體悟と云ふは何でありますか、今我々は前世の業因に依て生れたり、死たり、罪惡とか苦痛とか云ふ樣な、つまらない果報の身を以て己が本分と思ひ、かたく執ドて迷の中にありながら迷と云ふことを知らず、常に眞理にそむいております、こゝを顯名鈔には「衆生一念の迷妄によりて眞如のみやこをまよい出で流轉の凡夫となりし」と仰る、佛はそうでは有りません極めて圓滿な極て廣大な極て清淨なもので依估もなければ偏頗もなく平等で、宇宙の森羅萬象をこころりと腹の中に容れ心に懷きながら、意ともせざる廣大な御慈悲を以てある、眞理卽ち眞如を以て御自身の御體と覺せられました。それで有るから生老病死ぢやの、罪惡苦痛ぢやのと云ふは影だにもなく丁度高き樓に上りまして四方を眺むる如くで、自由自在を得て身も心も觸るゝところ誠の樂でなひところなく、それゆへ福德は限りな

く壽命は量られません、是を佛界と云ふので有りますぞや。我々も此樣な境界になりたひものではないか、故に釋尊轉迷開悟の道を御懇に御說法下された。乍去此に一つの疑が起りました、あの迷たの悟りたのと云樣なことは何から現れたものか、理筋より御話を願ひます、こう云ふと非常に六ケ敷して、爺さんや婆さんが分らぬけれども、拙僧が考には今まで學者の中にも、佛敎の道理を知らずして却て破するものが有る、それを聞て隣りの爺さんや婆さんの信仰まで薄くなる、よつて學者先生も佛敎を信仰して貰ひたひと思ふに依て、今日は爺さんも婆さんも靜に聞しやれ、御安心は明日御話を致すぞや。

サア迷と悟の差別は何から現れるぞなれば、これは外ではなひ因緣によりて生ずることで、目に見ゆる宇內の萬物卽ち世界のものまで、眞理卽ち眞如此眞如がそのまゝ體にそなへある、原因結果と云ふ規則で種々に現て活動すると云ふより外はなひ、ゆへに萬物の現れる象は因緣に順ひて忽ちに生ト忽に滅すと云鹽梅で、遷りかはりて暫くも滯ることはなひ、されども其眞理と云ふものは始めも終りも變りませんぞ、依て萬物は無常遷流のものと云ひ、眞理は常住不變のものと云ひます。然れども萬物をはなれて眞理が別に有るのではない、只萬物が因緣にそむかずして變化するもので、決して改ることのなきが眞理であります、今語をかへて申せば動物も植物も、眞理の才化で其物の本の體はいつも眞如であります。たとへばあのうどん粉を戶板の上で丸々として棒で延て、それよりこち〳〵刻み湯玉の中に入れ、暫くして皿に盛りますとつる〳〵とうどんになり又夏の頃部屋隅に置くと、上から雨がもり虫がわいて蝶となり飛び

ますが、又菓子屋の亭主にまかせると、上菓子となりて客の前へも遠慮なく出されますぞ、うどんとなり蝶となり菓子となれども、うどん粉はやはりうどん粉なる如く、其實は我人が認める天でもなく地でもなく山や海でもなく、動物植物でもない。丁度明かなる鏡の前に別嬪が行けば別嬪、醜女が行けば醜女が影ります、よく〳〵考て見やしやれ、其影りたるものは別嬪でも醜女でもありません、唯空寂透明なる鏡の光のみで、是を眞空無相と云ひます。然れども因縁に應じて象は急度顯れます、善因善果惡因惡果の影は少しも亂れず、迷悟境界の差別は一寸も違ひませぬ、鏡に向ふとき男は男女は女とさらに外の物が現れることはない、是を妙有現前と云ひます。五逆十惡の因縁で地獄餓鬼畜生の世界が現れ、五戒十善の原因で人間天上の果報を得、自利々他の功德で佛菩薩、是皆な因果の酬いで

あります。それゆへ眞理の中に十界の差別が現れるぞや、其體から抑へて見ると、地獄も極樂もきまりてない樣に見ゆれども、是は同ト人間でも貧富の異あり、又文明人は文明人野蠻人はやはり野蠻人大な違ひがあることは各も承知でしよ、このゆへに一切萬有はもとより有るとも無いとも云はれぬ、若し是を有と云はゞ常見と云て是は妄想なり、どうしてそなれば有と雖も其因を絶ち離るときは結果は有りません、結果なければ原因もなし因もなく果もなければ遂に物はないでないか。若し無と云はゞ是を斷見と申してこれも誤りと云ふより外はない、何故かと云はゞ無と雖も其因を修むれば必ず其果あり、果あれば因がなくてはならぬ、依く涅槃經には「因緣のゆへに有なり無性のゆへに空なり」と仰せられた。あの小學校の生徒をとらまへて、其方は中學校位の學問が有るかと云へばなしと云で

あらう、けれども無しと云ふべきにも非ず、是より勉強すれば後には學者となれますぞや。又草も木もなき畑を指して、此には桃や林檎が有るかと云へば諸君無しと答へるで有う、されど苗を植ゑて二三年する内には、甘い菓實を食ふことが出來ます。右の通り小學童子の學問と云ひ、畑の菓實と云ひ皆無いとも有るとも云はれまい、學ぶと學ばぬと植ゑると植ゑざるとの因縁に依るのみ。今地獄と云ふも極樂と云ふも、もとより眞空無相にして實體有るに非ず、只因縁に依て現れること決して違ふことはありませんぞ、衆生が佛になるべき因性を涅槃經には「有にも非ず無にも非ずして亦は有亦は無」と仰せられたも此意ぢや。然るに世間の無宗教の者は、ソリャと云へば此縁起を知らずして、地獄もなし極樂もなしなどゝ云調子であります、其人達が極樂はなしと云ふも一應其理はあります、己に佛界

を信ぜず佛になる因を修めざれば、佛の果をあらはす事がないからぢや。又地獄や餓鬼がないと云ふは、己が身や心を能く見やしやれ仁義道德とか忠君愛國とか云ふ樣な善心ばかりなれば、最も其人の言ふ通りぢや。苟も三毒煩惱の不善の種を心の田地に植ゆれば、何として惡趣の花實がないとは言はれまい、こゝを楠正成は「極樂を願はんよりは地獄を作るな」と申されました、さあ御同行分りたかや、分りたら善き道をつとめ惡き道を退けねばならぬぞや。

第六席

偖て前席に引續て御相談に及ぶ、乍併前席に辯じた中にまた不審が殘て有る、それはあの一切の物一ッとして眞如でない者はないと云はゞ、蚤や虱に至るまで眞如の理を具へ、佛性は眞如の理體ではありませんか、されば蚤や虱ごころでない山も川も草も木も、悉く佛

性を具て有ることになるではないか、然るに未だ此等が成佛すると云ことを聞かず。又我々人間の上にも賢人やら愚人やら色々有りまして、等く佛性を具へてあれば皆佛になるべき理なれども、これも成佛するもあり成佛せざるも有るは何うしたことぞと云ふに、是は前席に云ふ如く、成佛の原因を修むると修めざるとに依るものぢやたとへば氷と水とは同體で有るけれども、とけされば水とならざる様なもの、氷堅きものはとくることと又六ケ敷、氷薄きものはとけることと易いであらう、如是成佛するにも難と易とが出來ます、是に依て開發する原因を修めずは、煩惱の氷をといて成佛の果を得ることは出來ないぞ、是が各因緣の道理。因は原因のこと緣は事情、この因と緣とが和合して生ずるものを果と云ひますぞや。果は結果のこと、若し人本より佛性を具せずして成佛の果あるものとなすときは

因なきに果あることになる、若し佛性を具へながらも成佛の道を修めずして、其果を得るものとするときは、是れ緣なきに果を得るもの、已に成佛の果あるは佛性をたもちてあるに依るのぢや。佛性を具へながら悉く成佛せざるは、其道を修めざるによるものぢやぞや是等は皆因果の理にして今日の學說によくかなふてあります（さあ同行衆是の佛性の御話を聞て間違ふものが多い、今日の話は通途の上のことで、我が眞宗別途の義は、これより日數をへて十四首目の讃、罪業もとよりかたちなし、妄想顚倒のなせるなり、心性もとよりきよけれど、この世はまことのひとぞなき、とある御讃に移りたとき御話を致すから、其時までまつて下されよ）

偖て先程よりしば〳〵御話に及んだ如く、あの眞理が動て色々變化するのは因緣なり、此因緣と云ふものは眞理の外に有りますか、又

眞理の内のものであるかと疑が有で有う。それは先尅も云ふ如く、眞理の外に萬物なく萬物の外に眞理はありません、因縁も萬物の外ではない、外でないばかりでなく萬物として因縁とならぬものがない、ゆへに結果とならぬものは一つもない、たとへば今年の籾を去年の籾種にくらべますと、是れ全く結果と云ものでで、明年の籾に對しますと原因となる如くでありますぞや。此で過去未來現在の三世の御話を致さねばならぬ、三世と云ふは人間の一生の前後を云ばかりでなく、すべて時の前後を云ものでで、今日にありましては昨日は過去で明日を未來と云ひます、されば今日が現在でありませう、一秒時間にも三世の差別がありますぞや、今日の果報は昨日の過去に働たものにより、今日働く因は明日の未來に必ず生ます、されば因果あれば時の前後が有ることは云はずとも御承知でしよ、今日で

ろ〳〵ぱち〳〵と鳴り出す雷は、此前の氣壓に催したの、今日西の方に黑雲が出たれば、必ず其果は未來の時に生ますわい、各能々此道理は御承知下されよ。今一往物件に就て見ますと、宇宙ははてなし萬物は澤山にして、彼れや此れやの間は遠いやうなれども、因縁の連絡を推し究めますと、相待ち相藉るもので獨立ちするわけではない、今此本堂は木や竹や釘や土の寄合で、互に因ともなり縁ともなりて出來てあります。然れども〻で一つ考へますと、此木は何處で出來たそれはもとより山、其山が何れの所と段々推し究めますと、他村の山までが因となり縁となつてあります、これと云ふもみな因縁の勢力で出來たものぢやで、遂には風がやめば波をさまりて水となる樣に、物も心も自身も他人もなく、只平等空寂の境界になります。さあかう云ふと氣味が惡いか顏が青くなりたぞ、よくよ

く聞かしやれ、平等を名て空とし差別を名て有と云ひますが、眞如は有にもかたよらず空にもかたよらずこれを中道と云ひます、それゆへ平等なるも眞如、差別なるも眞如、萬物の體は卽ち眞如の一理、此眞如の一理物心をはなれて別にはありません、ゆへに九界は九界の因緣あり、佛界は佛界の因緣あり、迷悟のまゝが眞如でありますこゝを本具の十界とも云ひます。本具の十界と云はゞ因緣をからずして、萬有差別の分子を含むと云ひますかと云ふに、さうではないそれは單に迷情の上にのみ差別があると云ふのでない、眞如の上にも差別を顯します、何うしてかと云へば眞如其のまゝで差別を含むと云ふでなく、唯因緣によりて萬物を現すがゆへに、平等も差別となり差別も平等となる、是を本具の十界と云ひます。已に本具妙有と云ふときは、皆さん因緣によりて生ずと云ふものゝ因緣、實に其功

がないで御座らぬか、功がないばかりでなく生も實の生ではありますまい、そこで是を不生とも云ふ、又因緣が虛くないで是を因緣生とも云ふ。世間の人達は唯今申す妙なる旨を得ないから、差別の有を嫌ひまして平等の空を尊んで、遂には一物もなき理想界を佛界と誤るものがありますぞ、先程申す如く眞理が自體の上にたもてる、因果緣起の法を基ひと致しますから、萬物みな平等差別の義を具へてあります、差別の分け有るゆへ迷たり悟たりみなへたたりて少も亂れません、平等の分けあるがゆへに迷の人も悟の境界に入ることが出來、佛も大慈悲を垂れ玉ひて迷の境界に入り來りて、衆生濟度が出來ます。虛空無邊なるによりて世界が無邊なり、世界が無邊なるゆへ衆生が無邊、この無邊の衆生が無始已來限りのなひ時間を過したれば、此中に於て悟の境界に致りました衆生、其數ははかられ

ません、こゝを御祖師は「已今當の往生は、この土の衆生のみならず、十方佛土よりきたる、無量無數不可計なり」と仰せられた、そこで此の世界に御足を留め玉ふ釋迦如來の金言にて、十方諸佛の御名もきゝ、又ましますことをもしりたるものぢや。佛果の勝れたるを敎へ玉ふ、十方諸佛の其中で、一番西方が勝れてあるゆへ、彌陀の本願を信ずて大願業力の一つ働て往生させて貰ふぞと、御懇なる御敎化ぢや喜ばひではなりませぬぞ、又何事も明日に於て辯ずませう。

第七席

今日は早やうから參らしやつたが、昨日一寸釋迦如來の御敎化の實意を申しましたが、今日は楞伽經の上で御話を致します。其の經文にかう有るのぢや「我乘內證智安覺非境界、如來滅世後誰持爲我說、未來當有人於南天國中有大德比丘名龍樹菩薩能破有無見爲人說我乘大乘無上法住初歡喜地往生安樂國」とこの懸記の御言に少しばかりも違ひなく、七百年の其後に南天竺の外道等が、有無の邪見を云ひ立てゝ多くの人を惑した、其時龍樹菩薩が出で玉ひ、有無の邪見を御碎きなされた。それは左樣に云はしやつたとて、昔の事では御座らぬか、サアそれは昔ばかりに限てなひ、當今今日今時にも一人や二人でなひかも知れぬ、やう聞ふぞや其邪見と云ふは有の見無の見である是を常見斷見とも云ひます。その有の見とはある無の見とはなひ、其有の見とは馬が死だら馬、牛が死んだら牛人間もやはり其通り、麥を蒔けば麥がはへ粟をまけば粟、瓜の蔓には瓜がなり茄子の木には瓜がなりはせぬと、人はいつまでも人と思て居る、成程一理有る樣ぢやが、若し麥や粟瓜

や茄子の種を煎ればどうで有ふ、人間も人間の道を守らば固より人間に生れます、乍去三毒煩惱の不良非理の行が有れば、是れ人間の種は何處に有りますぞや。又無の見とはあのランプの火を吹き消したやうなもので、固より人は天地の氣より生れて、天地の氣が集合すれば人となり、分散すれば死すなんと云ひまして、地獄極樂が有るものか、未だ見たことがなひと云ふ調子で、こんな間違ひの人には昨日辯ずました、一寸も動かぬ因果業感の道理を能く御話致さねばならぬ。我々の肉眼は借光眼で、なさけなひことには夜中にらんぷを吹き消せば、柱に頭をくらわすやら火鉢をはねかやし、遂には壁に行當り「寢とぼけて壁に引手をさがしけり」と云ふ壺梅で、ねつから戸が開かぬ、開かぬ筈ぢや壁ぢやもの、さあ明りをからねば見へません、それのみならず己が眼の睫毛さへあんまり近ひで見

へぬでないか、何百里も有る向ふは遠で見へぬ、又水中の虫などは少さくて見へぬ、又それのみならず聲や風は形がなひから見へず、何んと天文博士地文博士は現今多ひけれども、今日にありて明日の月や日を見たものは一人もあるまひのう。然るに無ひとは云はれまひ、今地獄極樂も是と同く、我々は只今は人間の境界ぢやで、未來が今爰で見へる筈がなひ、まあ未來と云ふ二字の文字をやうと考て見なされ、未だ來らずと書て有るぞや、普因普果惡因惡果は現に在る、各々や我々は不義徒らをしませんで極樂、若し今日只今一つの惡をなせば、後の未來は惡趣へ行きますぞや、惡が多ければ苦み多し、登ること高ければ落ることいよ〳〵深き道理ぢや。地獄の種蒔たで地獄へ落ち、餓鬼の因蒔たで餓鬼道、畜生の因蒔たで畜生道、五戒の因蒔けば人間、十善戒は天上四諦は聲聞十二因緣は緣覺、六

度萬行は菩薩三祇百大劫の難作能作の修行で佛になる、因果の道理は免れませぬぞや、各斯樣なことが出來るかや、出來ぬものなら彌陀たのみ、御祖師の御意にかなをうぞや。無常のはかなき有樣は「それおもんみれは人間はたゝ電光朝露のゆめまぼろしの間のたのしみぞかし、たとひまた榮華榮耀にふけりて、おもふさまのことなりといふとも、それはたゞ五十年乃至百年のうちのことなり、若し無常の風來てさそひなば、いかなる病苦にあひてかむなしくなりなんやまことに死せんときは兼てたのみをきつる妻子も財寶も、わが身にはひとつもあひそふことあるべからず、されば死出の山路の末三塗の大河をばたゞひとりこそゆきなんずれ」各油斷は大敵ぢや、未來となりた其時は持て行かれるものは、唯貰た信の御領解ぢや、貰ふた信の働きで安樂淨土の往生ぢやわい、こゝを御一代聞書に「衆生

をしつらひ玉ふ、しつらふと云ふは衆生の心を其のまゝおきてよきこゝろをくわへ候ひてよくめされなし候、衆生のこゝろをみなとりかへて、佛智はかりにて、別に御仕立さふらふにてはなく候」と南無阿彌陀佛をくわへ下され、凡夫のわろきこゝろを如來のよきおんこゝろと同しものになし下されば、佛になるよき御心とは智慧と慈悲、智慧下されたゆへ往生に疑ひはれ、慈悲下されたゆへ常行大悲妻や子にまで領解させたひ貰はせたひと「信を得て喜ぶ人の言の葉は假名に書たる經陀羅尼なり」これ御同行今日も御祖師は、御淨土から此本堂へ御影向、されば御馳走上げぬかや。

あの都の御客が來た時は、御馳走は何で有ふか、うどんかそばか又すしか魚か酒か、そんなものは都人は見とうもない、さあ何で有ふ云ひ當てゝ御覽、都になき御馳走が二つ有るわい、今御祖師への御

馳走も御淨土になきものが二つ有る、今都人が思ひがけなく來た、そりやと云て亭主は俄に座敷をはきたてゝ、さあ此れへ御通りそれから馳走ぢや、田舍のことで何にもなひ、これは何としたればよひで有ふと一と思案。亭主は横手を打ちながら、おゝそれ〳〵あの御客さん御遠方よう御出下されました、乍去今日は天氣よく殊に涼しふして心地よければ、暫く野原に散歩をと、都の御客を引立てゝ廣ひ野原へ出て行けば、いや一面に青稲葉、あそこやこゝ萩や桔梗や女郎花、あたかも錦を織りなせる有樣にて、都の御客はいそ〳〵とした心地にて、いや亭主斯樣なよきことは都にはないぞと云ひつゝ遂に海近き所に來たれば最早日暮となる。ところがはるか向の波はたよ〳〵動き屈り曲れる老たる松樹に白雲靉き、其松樹の間から滿丸とした月が出て、何ともかとも言はれぬ景色、御客がこれ亭主あ

の月はよいのう、加樣な樂ひことが有ふかと見てありしが、ふと足元の草叢にチンチロリン〳〵と鳴く虫の音。これ亭主この足元にチンチロリンチロと鳴くは何ぢや、へいそれは虫の音、これはこれは嬉ふて心地のよひことは云ふに云はれぬわい「月の出に虫の鳴する都人」さあ都人の御馳走は月の出と虫の音の二つぢや。今御祖師は衆生可愛や不便やの御慈悲にて、御淨土の都より娑婆の田舍へ出で來り、あちらこちらと廻る内、衆生の三毒煩惱のまがり〳〵た松の間より信心の月が出て、仕事世話敷草叢に、ちんちろりん〳〵南無阿彌陀佛〳〵、御恩の稱名喜ぶ身になれば、御祖師は是を御覽遊ばし、あゝこれ程の馳走はなひと御喜ぢやぞや、御同行此二つが御祖師への御馳走、御悲歎なされた御顔がいつの間にやらにこ〳〵と轉トかはりて御喜び、さて有難や〳〵と御恩の稱名。

第八席

偖て引續て悲歎述懷と云ことを辯ずましたが、是は御祖師が御歎さ悲み、思ひにたへかね問はず語りの獨り言を仰せられたのなれば、祖師の御慈悲の涙を封ず込めたが此御和讃、是は外ではない無常の世界を常住と思ひ、彌陀の本願信せずして、むなしく三惡道に墮ずることを歎き玉ふのぢやわい「古墓何代人不知姓與名、化作路傍土二年々春艸生」各々方や我々は生れては死に死しては生れ、此に生れ彼に死し彼に生れ此に死す、生の初も知らず死の終りも知らぬとは殘念至極、必ず餘處ととに聞きながすではないぞ、行作遷流と若きは老に至り、五十年の定命は過し安し、我人身體は六十有餘の元素を以て、假に和合せる肉體なれば、人初めより未だ曾て死に非ず、死と云ふは此身體の上より名けしものにて、神來りて此身に

託す是を生と云ひ、神此身を捨てゝ去る是を死と云ふぞや「死に嫌ひ生れて來たが無調法」神と云ふは我なり、吾々去つたり來たり有る形は我家屋なり、主が居らねば家がやぶれる。此身は唯是旅宿の如く、傷しいかな親く言を交へし朋友も息が止れば遠く送り、契を結びし妻子もはなれ、墳墓の下に埋れんとは在五中將は歌へり「散れはこそいとゞ櫻のめでたけれ浮世に何か久しかるべき」と、狂歌師の貞柳と云ふ人は頭をふりて「散れはこそいとゞ櫻はめでたけれけれども〳〵さうぢやけれども」と、然るに世間の人其神を知らず徒らにその形を愛し生を喜び死を恐る、さあ神の來るは何れより來ると思はしやるか、悉く業緣によりて來る、又去るも業緣によりて去る。業とは何でありますとりもなほさず常になしたる所の業なり人間の業をなせば人間畜生の業をなせば畜生、地獄の業をなせば地

獄、彌陀本願南無阿彌陀佛の業力に依れば西方淨土の往生ぢやぞ。
然るに彌陀の本願を疑て靈魂の歸着をつけぬゆへ、御祖師は御胸に
悲歎の涙はろ〳〵と流して御座るぞや。

去る在所に夫婦に盲の母と三人くらす百姓が有つたが、あの盲目の
母は元來此男のためには伯母で、この男が幼少の時兩親にはなれて
伯母の養育で成長せられたが、殊の外極蕩で大酒は飲む博奕は打つ
茶屋狂ひ色狂ひ仕方のない道樂者、伯母の言が氣に入らぬとて、時
々打ちかゝれども伯母はさら〳〵恨む心もなく、我はつれなふあて
られても少しも惡いとも思ひはせぬ、若し天道の惡みを受けねばよ
いが、これで行末ぞうなるぞと思ひつゞけ、遂に兩眼を泣きつぶし
盲となりた。其樣な男に添ふに似合はぬ女房は孝行者で、此時亭主
が女房に云ふには、近年は困究が續て甚た渡世もやりにくい、我々

夫婦は若い者、隨分働けば世渡りが出來ぬことはないが、あの目の
見ゐぬ老ボレの母は、唯いさり喰で手傳とては一つもせぬ、足手ま
とひの老ボレの面倒は見ともないわい、山へ捨てゝ仕舞ふがよから
うと思ふと云へば、女房は夫の顏をうちながめさても〳〵どうした
御了簡、あの母さまは御前をば幼い時から兩親に代りて御養育、御
前のためには眞の伯母、こゝして況や命の親眞實の親君より御恩の深
い母さまを、目がつぶれ役に立ぬとて深山に捨つとは勿體ない、せ
めて孝行はなさらぬとも其御心を改てと、夫に向て意見すれば、さ
て此相談は出來ぬと思て、成程女房の云ふ通り誤つた、これから己
れも心を改て孝行するぞ、必ず氣遣ひするなと口と心は裏表、それ
とも知らず女房は其の詞で私も落付ましたと其の日は何のこともな
かりしが、それより間もなく女房は親里へ用事が有りて行かれた留

主、今日こそ邪魔になる女房は親里へ追ひやりたれば、今こそ幸ひと思ひつき、それより母に向ひ今日は女房も留主、さぞ御さびしからう御氣を延しに、私が負ふて野原を見物に參りませうと云へば、母親はいつもにないやさしい詞、氣持が變ッたと我身を捨てに行くを露知らず、いそ〳〵と背に負たれば、しつかと深山へ負て行、さては我を山へ捨てに行くのか、又池の中へでもぶちこむのかいと、加様に奥深い山に分け入ては、我を捨てゝ歸る子が道に蹈み迷ふかとまた親の慈悲で負はれながら、道知るべに木の枝を折りて行く、それとも知らず何ゆへ木の枝を折らしやる。されぱかやうな奥山に入ては、御前が歸りに迷ふかと思ての道知るべ、さてはこいつはは合點したか、今日は貴様を捨てに來たと母をどつかとおろすや否や己が身體は天罰で谷底へこけ落ちて、遂に命がなくなりたと、此意

を古歌に「奥山に手折し枝は誰がためぞ我身を捨てゝ歸る子のため」是れ親と云ふものは慈悲深いもの、あまり不孝で兩眼まで泣つぶせども子が惡いと思はず、我は捨てられても我子が迷はねばよいと、道知るべに木の枝まで、何んと各も親の御恩を忘れてはならぬぞや孝行しなされよ、祖師聖人は機を高ぶり法を信ぜず、假の浮世をとかく〳〵と折りまわりて、三寶を輕しめ往生の親さまへ雜行雜修の不孝を盡す有様を御覽なされて、兩眼から悲歎の涙に泣きつぶるばかりぢや。それも惡いと思召さず、仇敵となりたる我々を、どうぞ三界生死の奥山に迷はぬやうに、眞實報土に至れかしと、極樂淨土の道知べに、御悲悲の涙を封ド込め御殘しなされたが、此和讃の味ひぢや程に。

第九席

浄土眞宗に歸すれども　眞實の心はありがたし
虛假不實のわが身にて　清淨の心もさらになし

偖て追々席を重ねて聽聞に及びましたが、今日よりは本文に移て辯ドましよ。此御和讃大に分れまして二つとなります、初の六首は往生淨土門を信受する身の上に就て御悲歎なされ、次の十首は聖道門を兼ては淨土門に入て、不如實不如法なる者に就て述懷なされた。さて往生淨土門を信受する身の上に就て悲歎し玉ふ中、初の三首は法に入りて機を慚愧することを御明し、先づ此一首は凡夫の心不實不淨なることを御示しなされて、御祖師自ら悲歎し玉ふ。此悲歎述懷和讃の心は、正像末和讃の眞最初に「釋迦如來かくれまし〳〵て、二千餘年になりたまふ、正像の二時はおはりにき、如來の遺弟悲泣せよ」との玉へる悲みの餘りた意で、悲歎してたらず猶是を御記しなされ、末世に告げ玉ふのぢや。やうと聞かしやれ淨土眞宗に歸すれどもとある、淨土眞宗とは卽ち如來に眞向になると云ふことで、眞宗の眞の字は眞向のことぢや、他宗よりは一向宗と云ふ是がまことにまむきのことぢや。然れども一向宗とは御祖師の立て玉はざるゆへ用ひねども意には別にさはりはない、世間にも貞女二夫をならべずと云ふなれば、一向宗と云ふても碍りはありません、水晶を手に取りて日輪の火を取るに、水晶が少しでもゆがめば火が取れませぬ、眞向に以て行けば日輪が移りて手早く火が取れますぞや。今も彌陀と眞向になれば直に衆生の胸の内へ、衆生貪瞋煩惱中能生淸淨願往生心と、手早く信心が移り來る、依て和讃に「五濁惡世の有情の選擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみてり」と仰せられた。

さて浄土眞宗にとあるにの字、本字に書くときは于の字を書く、そこで無碍光に歸すとも、本願力に乘ずればとも、にの假名は向ふと云心で古人が「迷則法從人證則人從法」と云はれました、月に背を向けるときは足下に影が移りて闇いが、月に向ふときは足下が明るい。今も本願に眞向になれば、煩惱の影は後ろになり領解の足下が明くなる、煩惱も喜びの邪魔にはならぬ、然れども御本願に背を向けるゆへ、領解の足下が闇いから若存若亡が起りて、煩惱が邪魔になりますぞよ、古語にも「魚鳥如逆水風」と云ふて、魚は水に向へば波に順ふゆへ游がれる、水に後を向けると波にうちこめられる、鳥も風に向へば能く飛び風にそむけば羽を損する。今も御本願に向へば貪瞋煩惱の羽も鱗も損せねども、本願にそむけば貪瞋煩惱が苦になり、上べ相は信者振りに見せかけて心の内は若存若亡、

やさしい心が起て見れば是ならば大丈夫ぢやと思て見たり、つまらぬ心が目に付くとこんなことでは行けまいと、是は本眞の信心ぢやない、其本眞ものとは己が自力を捨てはなれ、信順歸命の眞向一つぢや、ゆへに蓮如様は「眞實の信心獲得なくば今度の報土の往生はかなふべからずとみへたり」と仰やる。次に歸すれどもとある歸の字は、歸入の義歸命の義ぢや、依て御本書の行の卷では、歸は至なりとありまして至は玉篇に來なりと有り、至來と續て諺にうまふ來たと云ふこと、無疑無慮乘彼願力定得往生と、脇目ふらずに本願のつぼへうまふ來たと云ふことぢや。亦玉篇に水の流れ至る如くに註して有る、依て歸は歸依歸附歸投歸委と熟して、歸依とは思ひつかせる思ひつく、歸附とはとりつくとりつかせる、歸投とは打こませる打こむ、歸委とはまかせるまかさせると云ふことぢや。さあ衆生の

本願に取り付くは本願が眞向に取付かせるなり、打こむは向から打こませる、又歸は稅なりとも有りまして、御本書には歸稅なりと註して、史記には「我未知所稅駕」とありて、註に稅駕は猶解駕と有れば駕をほどくのぢや。又休息なりと有る、詩經註には稅は舍なりと有て、やとらせるやすませるやすむ、是れ本願にやとらせ下さるゝゆへにやとらせる、やどらせるがゆへにやどるなり、又やすむと云ふはたま〳〵安心門に入りても、二十の願にやどりてはかう勤めてかう稱へてのうろたへが有るが、第十八願に歸してうろたへず往生は一定と帶もとけて安堵したるところをやすませて下さるゝと云ふ、ゆへに今は未來のことには安堵してやすむやうになるのぢや偖てこゝに有る歸すれども云ふは、歸するは歸したれども云ふ義で、法に入て我機の淺ひことを慚愧せよと云ことぢや。元來凡夫

の心と云ふものは膺物でありまして、近年は品物でも膺が多ひ、此品物の膺はまるで心の膺が致します、それゆへ已が身體に膺が次第に現れる。あのなまづの樣な髯をはやして洋服を着け、無學なものも學者の眞似、なにも西洋かも西洋ハイカヲ先生が澤山で、若ひ目の達者なものが衛生だと申して眼鏡をかけ、ステッキを手に持て近目の眞似を致すやら、三四十にもなる嫁さんが染た齒をはがして、茄子色の樣な牙をむき立て眉毛をはやし、どんと娘の眞似をしてどれが嫁やら娘やら、姉さん方は力も强ひが頭の髮は三百三高地卷、遂には英吉利卷の國までも頭の上にねぢつけて、男女同權とか自由結婚とか、親は有てもなひも同前、何も活潑かも活潑と云ひならすお轉婆娘が澤山あるぞ、是がホントの膺の親玉、御經の中にも芭蕉の如くにして實なしと歎かれました。各々も御承知の通り、あの芭蕉と

云ふものは外面より見ますと大木の如くで、柱や梁にもなるやうちやが能々調べて見るなれば只皮ばかり、ゆへに柱や梁どころでなひ僅か楊枝にもならぬでないか、今御互凡夫の意もそれと同ふして、外から見ますと佛道修行も出來る樣でも、篤と心根をさぐりて見れば三毒煩惱の皮ばかり、加樣なつまらなひ心を當てにせず、我身は惡き徒らものとりゑ作法のなき罪人ぞと見限をつけ、かゝるものをも御助けの尊さよと願力に任せ奉る一念で、光明の中に遊ぶ身となられるのぢや程に、御恩の深きを忘れてはなりませぬぞ。

第十席

偖て前席より辨ド掛けました御和讃、第二句目の眞實の心はありがたしと有る御文に就て御取次に及ぶ、此ありがたしと云ふは、有難ひの忝なひのと云ふ言とは大に違ひます、有りがたしと云ふは凡夫

には眞實の心は少しもなひと云ふこと。さて此眞實と云ふに二つ有ります、一には有漏の眞實、二には無漏の眞實、初の有漏の眞實と云ふは貧乏なるものを見ては、眞實心の底から不便に思ひ、飢たるものを見てはほんにまあ難氣で有ふ、少でも與へてやりたひと思ひ人の難氣を我身に替へて世話をする、是を有漏の眞實と云ひます。次に無漏の眞實と云ふは、是に亦二つ分れまして、自利の眞實、利他の眞實、其自利とは上求菩提と申して、何卒未來は佛になりたひと云ふ自力の一心のことぢや。さて又利他とは下化衆生と云ふて、法界の衆生を平等に助けたひと云眞實のことぢや。各我等は有漏の眞實もないが、況や無漏の眞實に於てをや、畑の蛤ホッテもなひ。あの叡山の座主慈鎭和尚は、修行戒行なされて見たが、昨日も今日も未來の認めがつかぬゆへ悔しがつて御座るところへ、ゴーンと鳴

出す鐘を聞き、涙ながらに讀れたが「今日の日も暮れぬるとのみ告る鐘胸にこたへて涙こぼるゝ」さあ後生が苦になり、あつい涙で泣かしやッたが各はどうぢや、一度も後生のためとて泣たことはあるまい、それゆへ元祖法然聖人は「假り初の色のゆかりの戀をだに逢ふには身をば惜みやはする」と御詠遊ばした、僅な戀には情死だの饅頭だのと騒ぎ立ち、身をも惜まぬ心で居ても、後生のことには何ともなく、うか〳〵暮して誠に眞實の心がなひと御歎なされたわい氣違でも亂れ騒ぐとき穿屋へ打込と云へば恐て逃げ廻る、夫れに地獄へ落ると聞き乍ら、うか〳〵暮す其の奴は氣違よりも劣た根性。若し指一本でも生れながら片輪で有るを、直してくれる醫者が有るなれば、何處ぢやと千里も近く行くで有ふが、それどころか此身體丸々地獄で湯燃猛火に焦さるゝが恐ふなく、指一本が可愛て體は一

寸も可愛なひか、節氣は近寄る金はなし、後生は近寄る信はなし、斷り云ふても斷りや立ず、無常の風に用捨はなひぞ。あの名高き獨山人寐ぼけ先生の辭生の句に「今までは人の事かと思ひしに我身となりてこゐつつまらん」婆さん有漏の眞實も無漏の眞實もなひ、それゆへ御祖師は御悲歎ぢやぞへ。或人が此眞實心と云ふは他力の信心のことぢやとさはいて有れど、是の眞實の心を他力にしては一向つまらぬ、なぜと云ふにこの御和讃は、祖師御自身のことを仰せられたものぢやに依て、他力の眞實にするとかうなるのぢや、是の親鸞も他力の眞實がなひと云ふことに成て、祖師が未領解になる、依てこの所は凡夫には實義のなひものぢやと、御悲歎なされたのぢやと見るがよひぞや。

さて眞實の心はとある、はの字の手爾葉にも三通有て、一には手爾

葉のは、二には簡別のは、三には不同のは、そこで手爾葉のは何にも心はない、眞實の信心得ざるをば、一心かけぬと教へたりと有る、是讃などのは手爾葉のはで、見れば聞げばなど云ふと同ト、とで何にも意はなひ。二つに簡別のはとは、それはこれはと物をはらび分るときに用るはぢや、例せは三人の子を持て居る時に、兄は親の跡をつがす、弟は家を立てゝやる、三男は養子にやると三人それ〳〵に品を付るとき、兄は弟は三男はとはでをらぶ。御和讃にも利他の信樂うるひとは、願に相應するゆへに、教と佛語にしたがへは外の雜緣さらになし、是の讃の利他の信樂得るひとはと云ふは、はて不信と信者をよく別けたはぢや。依て利他の信樂得るひとは乃至外の雜緣さらになし、又利他の信樂得ぬ人は、願に不相應するゆへに、教と佛語にそむけは外の雜緣來て信を亂すと云ふ意になる、是

等は簡別のはぢや。三に不同のはとは、はと云ふは詞の下へ自然とこそと云ふ言葉がつくを不同のはと云ふ、君なればこそ親なればこそと云ふ如くぢや。あの善導讃の下に「煩惱具足と信知して、本願力に乘すれば、すなはち穢身すてはて〻、法性常樂證せしむ」と有て、煩惱具足の身が本願力に乘すればこそ、法性常樂に至るやうになりたのぢやと云こゝろ、是等は不同のはぢや。今此讃の眞實の心はと云ふは、三のはの字の中では簡別のはで、眞實はなくて不實ばかり、御證りに至る智惠はなくて、煩惱ばかりでかためたる凡夫ぞと仰せられた、然れは是の讃は祖師の御自身によせて、今日我等へ直の御勸化、淨土眞宗に歸すれども眞實の心はありがたし、已れは唯不實ばかりの身ぢやが未來は何とすることぞ。然るに彌陀如來はいかなればこそ、かゝる不實の私を見込で御助け下さるとは、さ

てく尊き御本願、たのめは助かると聞て疑なく、本願にすがれよもらへ、往生決定の領解にもとづきなば、何の中からも御恩の程を喜へよと仰る、人の物なら遠慮がいる、我物なれば遠慮はないぞ「御慈悲をはもらふに何の苦勞なし、其儘こひにゆくばかりなり」「其儘に來れと呼ふ彌陀なれば參る我身の足のかるさよ」南無阿彌陀佛の御六字は他人の物を取るのぢやなひ、是れや實相卽爲物彌陀の身代あるだけは、外の物のためでなひ爺や婆のためにして、發願廻向の與へもの、凡夫か手元は其なりで、聞得る信の一念が淨土往生の決着ぢや、此信決定するなれば時々刻々か極樂道中、こんな味ひ貫ふたら、日々に三度は吾身を省み、日送りさせて頂くが、念佛行者の身上ぢや。

第十一席

淨土眞宗に歸すれども止。偖で御一同に引續て能ふこそ參詣なされた、昨日より辯ずる眞實の心はありがたしと有る、第二句目の御文是の眞實と云ふ文字は二字共にまこと〻讀で、其まこと〻はうそのなひ僞りのなひこと、そのうそのなひ僞りのなひまことのこゝろが眞實で有るが、昨日も云ふ如くこの讃に眞實の心はありがたしとあるは、他力の信心のことには非ずして、これは凡夫性得の心にして不實なるゆへ實の心がなひぞと御悲歎なされたのぢや。是を御本書の信の卷には「一切群生海自從無始已來乃至今日至今時穢惡汚染無清淨心、虛假諂僞無眞實心」と仰せられた。吾人の住んで居る世界は、迷妄の因緣によりて感ト受けたる境界ぢやで其の眼に見るもの耳に聞くもの、多くは迷情に順ひて煩惱を發す媒介でなひものはありませぬ、それゆへ穢れ〳〵た性根玉、虛やら諂

ひやら偽りやら、本の上べばかりでまことのなひが衆生の心、こんな心で有るゆへに無漏眞實の報土へは影もさゝれぬぞへ。然るに阿彌陀如來は御見捨てなく、惡人可愛や女人不便やと思召し、眞如法界を御覺なされ、法身を顯し玉ひ、此法身の寶藏より開發なされた る平等の大慈悲を以て、一切衆生の苦の根を拔て、大安樂な身にしてやらふと呼で下さる勅命を、疑なく慮りなく信順する一つで、我等が往生は佛の方より定め玉ふぞや。依て善導大師は散善義に「決定して眞實心の中に廻向し玉へる願を須て得生の想をなせ」と仰る眞實心の中に廻向し玉へる願とは何で有ります、如來廻向の眞實心其廻向とは下され物、須ゆるとは用に立てます、用に立るとは我往生の用に立ちますのぢや。

昔京都に名高き狂歌師が「性根玉みがくたけには光るべし性根玉でも何の玉でも」と讀まれましたら、是を蓮如樣が取違へて「性根玉みがくはおろか其儘で南無阿彌陀佛の玉をいたゞけ」と御詠遊ばされたとある。今も其の如くあゝ思ふたのかう心得たのと云ふ樣な拵へ心をやめにして、南無阿彌陀佛の玉を頂くばかりぢや、ゆへに最要鈔には「信心とはまことの心とよむ上は、凡夫の迷心に非ず全く佛心なり、此佛心を凡夫に授け玉ふとき信心とは云はるゝなり」されば信心とは佛心ゆへに、觀經には佛心とは「大慈悲是なり」と如來の御心は末とげる、凡夫の心は末とげぬ。そこを最要鈔に「凡夫の誠の心とおぼしきは一念起すに似たれども全く末とはらず、然れは光明寺の御釋にも、たとひ淨心をおこすと雖も水に畫けるが如しと見へたり、やぶれやすきこと云ふに及はず、やぶれやすき凡情を以て治定すべきに非ず」と仰せられた。さあ一つの事を千日ばかり思

ひつゞけて見やしやれ、思ひつゞけられるかのう千日どころでなひ一日一時間もされ〳〵ぢやぞ、ゆへに源信和尚は「妄念は本來凡夫の地體なれば、妄念の外にこゝろはなきなり、臨終の時までは一向妄念の凡夫にてありと思て念佛すべし」と仰る「こゝろへて居ながらすべる雪の道」表向を尋ねたら聞て覺て分りて知りて、語にかけで信者の眞似、其心根を探りて見ればこんな心で參れまひか行れまひか、遂にかの字の疑か地獄へ落る根本となる。あの盟の中へ一杯水を入て墨を少し落して御覽一面に黑くなる、參られやうか往かれやうか、かの字の疑一寸でも命終るや否や一百三十六地獄、疑の黑墨がはッと擴りますぞ、少しばかりの疑でも有ては往生出來ませぬ箇樣に申すと各々方疑を去らんとて、胸に手をあて思案なげ首さつしやるが、さあ心配しなさるな借りた證據か貸した證據、助ける證據、落る證據が落さぬ證據、衆生往生の證據は南無阿彌陀佛、彌陀正覺の證據も南無阿彌陀佛、衆生佛にならずは我も正覺取じと誓ひ玉ひた因位の誓願、約束通り成就しおはせた南無阿彌陀佛、かるがゆへに南無阿彌陀佛と聞かば、あゝ早や我往生は成就しにけりと思ふべし、されば曇鸞大師は實相身は是爲物身と仰せられ、彌陀の眞實功德の其儘が直ぐ爲物身、我等を助け玉ふ御相、蓮如樣が我等衆生の往生の體は、南無阿彌陀佛と聞へたりと仰るも此由れぢや。されば只間違はさぬの仰せに疑はれる、凡夫の手元で疑を除けふと骨折るぢやなひ、佛智不思議を聞て見りや、往生一つは間違はさぬ、此御謂れの聞たまゝが疑が去りたの、疑の去りたまゝが明信佛智、闇ひ胸へ明ひ御慈悲が頂かれて見れば、明ふせふの骨折入らず、ひとりでに明ふならるゝぞや。阿彌陀如來樣が凡夫の手元へ發願廻向の有

樣は、恰も父が子に財産を悉く與へるが如く、其働きは父に有て子は能く受くるばかり。いやそれは形の有る物の上に就ての事ぢやなひか、形なひ物が何んとして貰はれます、私の心を以て貴公に施すことはならぬ如く、たとひ阿彌陀樣が與へると仰るも、我等もとよりそなへある煩惱の心を以て信ずるときは、此煩惱の心が混りて淸淨となることは出來まひと云ふに。子の心と親の心とをとより親ひ關係あるゆへ、父も能く兒に讓り兒も能く之を受くることが出來ます、今阿彌陀如來も迷とか悟りとか、自身とか他人とか云ふ樣なへたてがなひ、ゆへに凡夫と彌陀とは親ひ中ぢやぞ。併し此心と云ふものはころころの畧語と申して、實に移り易く定りた性質がなきゆへ、他の力を以て自由に改へられます、却て形の有るものよりは容易き道理で、あの世間に智識を交換する如く、學者が永らく力を盡して勉强したものを、能く弟子が受取ることが出來、先生の智識全く弟子の智識で有ふ、又不忠不孝の者も能く善心の人の敎誡を以て忠義孝心となる其時、我は此惡心を除けて置て、それから其方の善心を聞くと云ふことはあるまひ、惡心のまゝ善心の人の敎誡を聞くなり惡心が善心となりて、今までの惡心は跡方もなくなるで有ふ、然れば衆生が善智識に遇て、佛願の生起本末の聞へたまゝ、阿彌陀如來の大慈悲が衆生の心中にぶちぬけて、淨かな信心を發さしむ、やれ有難やと迷の雲は立所に散去りて、いつ思ひ浮べても御慈悲御慈悲と喜ぶより外はなひ「罪咎の有るを目當の法ときく御慈悲〳〵の外なかりけり」御恩が御恩と知られたら、喜び上げては南無阿彌陀佛。

第十二席

偖各未來は彌陀本願の直道でなければ往生はならぬが、此世界も亦直道傳ふて世渡りをして貰ひたひ、只口にばかり道德〳〵と云ふても、實行がなくてはかなはぬ、今御祖師が眞實の心はありがたしと御歎きなされたは此の道德のすたれたことぢや。今日は佛法弘通とは云へども、人の心の中に立入て見ますと昔とは大な違で、佛法其跡を絶ちて外道邪宗が入り滿てある、たとひそうはなくとも本統の佛法の妙味が明になりてない、因果の道理は知らずして我儘氣儘、法律の下さへくゞれば心の耻ずべきことも知らず、人道も人倫もみな〳〵墮落する樣になりてあるから、天皇陛下に於せられても大御心をなやまさせられ、御勅語の中に「克く忠に克く孝に、兄弟に友に夫婦相和し朋友相信ト、恭儉己を持し博愛衆に及ぼせ」と仰せられて有る、さあ同行衆祖師善知識の御敎の旨を得て、佛法王法共に美

くせねばならぬぞや。此眞諦門俗諦門は丁度ランプの如きものにて信心の燈火は如何程に明かなりとも、これにとゞまるふ俗諦のほやがなきときは片輪ものにある、依て破邪顯正抄には「佛法王法は一雙の法なり、鳥の二つのつばさの如し、くるまのふたつの輪のごとしひとつもかけては不可なり、かるがゆへに佛法を以て王法をまもり王法を以て佛法をあがむ、これによりて上代といひ當地といひ、國土をおさめたもつる明主みな佛法紹隆の御願をもはらにせらる」と仰せられた、この王法と佛法とは密着なる關係がありたもすぞへ。此王法佛法を守れとは御開山や蓮如樣初ての仰せではなひ、其源は大無量壽經に懇に御說なされてある、孔子や孟子が初て說たと思はしやるなよ、孔子より已前の釋迦如來が、五倫五常の道を守れと說て有る、こゝを曇鸞大師は「諸佛菩薩世間出世の善道を說て、衆生

を教化する人なくんば、豈仁義禮智信の五常有ることを知らず」と仰る、是れ全く人間固有の道、されば是非とも守らねばならぬでないか、而して其道德の基くところは一つの信心の用きより外はなひゆへに華嚴經には「信は道元功德の母能く一切の善法を長養す」と仰せられた、皆さんが是を實行するときは眞理にかなふので信を信にすると云ふものでありますぞや。御文章には「祖師聖人の御相傳一流の肝要は唯此信心一つにかぎれり、これを知らざるを以て他門とし、是を知るを以て眞宗のしるしとす」と仰る、其信心とは如來樣の御實意を信ずるのぢや、如來樣の御實意の本源を伺ひ奉れば、末代の我々が無始已來造り重ねし罪業のために繫縛されて、三界六道迷に迷を重てありながら、それとも知らず只ぼんやりとして有るを御照覽有て、哀れ不愍と見召し、一々誓願爲衆生故一願積では惡

人のため、一行發しては女人のためと、終に御成就あらせられたが南無阿彌陀佛、此御六字の中には七科の別德を御そなへなされ、十方諸佛にならびなき甘ひ仕掛が七通り、其の七つとは、一には萬機普益、二には名號利物、三には聞信業成、四には一念尅果、五には回願他力、六には速得不退、七には次生成佛、此は是れ阿彌陀如來の七不思議、是を御祖師はひきしめて、圓融至德の嘉號は、惡を轉ト徳を成す、正智難信金剛の信樂は、疑を除き證を獲しむる眞理なり」と仰る、大願業力の御不思議とはこの事ぢやわい。此大願業力の御不思議を以て助けるぞよ救ふぞよ、末代の凡夫氣遣ふなよ五障の女人二の足ふむなよ、出て行く未來は必ず彌陀が請けあうほどに、其儘まかせの大悲召喚の勅命を、善知識の御化導の下で自力疑心を捨てはなれ、かゝる徒者を此儘御助け下さるゝとは、何たる廣

大深重の御慈悲ぞと、大安心の出來たのが他力御回向の御信心、さあ御信心頂で今日までは鬼がまつ身も引かへて、阿彌陀如來のまちかね玉ふ極樂道中の、念佛行者の身の上と成りて御吳れや。此信心貰ふたら未來は眞實報土の往生と、轉迷開悟の大目的を遂げ、此世に有りては佛祖の御恩を喜ぶは勿論、御國の御恩を報し、御規則を堅く守り、諸稅を遲滯なく納め、御上へは手數をかけぬ樣、人倫の道を守らふぞ、これが所謂實効であります、此實効は能く消化して利用せねばならぬ。極安ふ云ふとあの食事をするとき、皆腸の中へ入る腸の中には胃の臟がありて食物が胃の中に入る、胃の中には液が有りて身を動したり、體をゆるときは食物がとなれて恰も粥の如くなる、それから汁の如くなり又變して乳味となり、后には一は水一はかすとなり、かすは下へ下り水が上に上り肺に來て、外から吸

ひ込む酸素と一つになり遂に血液となる、是が身體中循環して始て命を保つと云鹽梅ですが。今道德も此通りで能く消化して利用せねばならぬ、食物が胃の中にあるまゝで消化せないと身體の大害となる如く、智惠や學問が有て理屈ばかりではいけぬぞ、智識を以てよく消化して、自ら其身に實行せねばならぬ。兎角社會は獨立はならぬ、其證據は此の本堂から出て歸る道に、御承知の通り小間物屋が是は上等の品是は舶來と待て居る、米屋には此米は消化し易く善良なものと、又たのみもせざるに車夫は待ち、汽車は時間を定て待ち酒屋へ行けば是れは正宗是は伊丹と、吳服屋へゆけばたま〳〵品がないとて、御客さんこゝ四五日待て下さらば大阪から來ると、いやもう澤山所々に待て居る、然に買手がなくては所詮がなひぞ。又貧富貴賤色々と有るが、皆互に客に來た思で助けられたり助けたり、

便りになりたりなられたり、皆道徳を以て行かねばならぬぞ、伊達政宗公は「此世へは客に來たと思へば何の苦もなし、朝夕の食事うまからずともほめて食ふべし、元來客の身なれば好嫌は申されまと今日の行おくり子孫兄弟によく挨拶をし、婆婆の御暇申すがよし」と申されましたが、各客に來た心得で何も不足を云はず、にこ〳〵と日暮させて頂き、やがて淨土の御果報ぞと「此世をはおひとまでひのせんごうのけむりとともにはいさよなら」。

第十三席

淨土眞宗に歸すれども止。偖て引續て御取次に及ぶ御和讃、眞實の心は我等には更になひと云ふことは昨日までに辯ずましたが、其中こゝろと有るに就て御話に及ぶ心算です、今日は學生の方々が多ひゆゑ、佛敎中萬法唯心の說が有る、これに依て大略申します。萬法唯心とは經や論の中に、心に二種の差別を說き玉ひて、一には絶對心、二には相對心、其絶對心と云ふは、彼や此やと云ふ樣に物と心とのさかひを分たず、眞理卽ち萬有の本體をひきくるめて心と云ふ併し印度の原語によりますと、心の名にも堅實集起慮知などゝ色々有るが、今は堅實の義で、あの樹木の中央の部分を樹心と云ふ如く眞理の中實一寸もかはらなひところを心と云ひ。又相對心と云ふは形の有るものにして、知覺のなひ物に對して、形のなひ思想分別の作用有るを心と云ふ、是は集起及び慮知などの義であります。而して初のは萬法唯理と云ふと同ト意味ですからさてをいて、後の分に就て聊か御話を致します。萬物は皆悉く眞理の才化で、其實は因緣同トからずして、暫く形を異にするまで、其相の用さも皆別々ですが心は知覺があれど物は知覺がなひ、その知覺の有るものは自由自在

の精神の働きが有り、其知覺のなひ方は常に不自由で而も能力がなひゆへ、只心のためにつかはれております。

凡そ世界の物は此心が有りて、後に彼れや此れやの差別があります

されば天と云ひ地と云ひ山と云ひ海と云ひ、何でも此樣なものは自から己れは天た己は地たと云ひ、又己れは山なり河なり海なりと云ひもせず知りも致しません、此は各々や我等が目に見て差別をするので、有るもなひもみな心の分別ぢや。心がなければ何として知ることが出來ましよや、されば心から浮べ現れたものにて初て知たものこゝを起信論には「心生ずれば種々の法生ト、心滅すれば種々の法滅す」と說かせられた。併し迷と悟の境界を現ずは、因緣によるものとは云へども心の運ひ樣でもの樣にでもなります、そして世界は各因と果とを備へまして、其の果の體は物と心との二をかね、其因

は只精神に有るのです。そこで仁義道德の心は人界の方へ屬し、貪欲無智の心は畜生界の方へ屬す、私が心若し五戒を持つて人倫の道を守れば、身も心も人間に生れますが、併し道德も知らず少しも恥る心がなきときは、形は人間で心は畜生の內へ宿移りして居ります のぢや。又因果の道理を能く辨へ佛に歸するときは、是れ心は佛の境界に屬してあります、たとひ身體は此に居ながらも、光明の中へ向て行のでありますし、因果嚴然としてあれば皆さん心のすへ場所が大事ぢやぞ、心のすへ場所によりて迷と悟との大な違が出來ます。丁度畫工が繪をかく樣なもので、自由自在にうつります、依て釋尊は偏に此心を誡めて善き事を行へと敎へ玉ふのぢや。併し吾人の思想分別の心と云ふも、其体をおさへるときは全く眞理にして、あの波と水何れも其體は眞如なるが如く、今相對心も永く絕對心にはな

れたものではありません、吾々がみとむる物心の現象の上にこそ差別があれど、眞如はいつも一味にして差別をはなれたもの、されはわづかな心識の眞理も、全世界の萬物の眞理も一つもかはりはなひ。此本堂の内の空氣も全世界の空氣も同ト こと、世界のものはみな、是で梅も眞如松も眞如、竹も眞如と云ふことが出來ます、こゝを一色一香無非中道と云ふのであります、まあ是等の咄はとても一朝一夕では出來ぬが、兎角各心に善き世界を造ることを早くして御呉や。併し其世界の事に就て現今の人達の中にも、自分の見識の狹ひことを知らずして、佛說の中に三千大千世界、又は十方微塵世界などゝ、此世界は數限りもないものぢやと說ぜられて有るのを非常に疑ひ、何でも釋迦は大なことを云ふ、是はみな虛妄で有ると申して佛法を謗るものがまゝ有る、佛敎に常に不可思議とか無量、無限と

か云ひますが、只無量とか無限とか一口に云ふてしまへばなにもわからぬ、そこで釋尊は吾々に少しは了解の出來るやうに、數をきりて御示しなされたので實は無限無量である、既に無量であるからは云何に大きなことを云ふても虛妄ではない、實に不可思議無量である。現在この世界でも我々は何のさまたげがないにもせよ、十里とか十五里とか向ふになると見へぬ、なぜ見へませぬ肉眼なるがゆへに見へぬ、依て望遠鏡だの顯微鏡だのと云器械の力をかりねばならぬ、併し此二眼鏡が出來ましてより已來、人の智識が進み化學とか理學とか云學問が出來ます、是れは二眼鏡の力によりますが、今望遠鏡の御影で見へし御話を致そう。貴公達夜中に天を見れば、きら〳〵した澤山な星が見へましよが、其中で常に東から西へさして行きて、少も南北へ偏らぬ星を恒星と名け、又東西しなから少しづゝ

南北する星を遊星と名けます、中にも御同行が能く知りてあるのはあの明星と云星であるが、朝東に有るときは朝の明星と云ひ、晩に西に有るときは夕の明星と云ひ、是は一つの星で金星と云ふぢやが之を望遠鏡で見ますと、南の極と北の極には雪のつもりてあるが見べます、雪があるときは雨が降るに違ひなひ、雨が降れば草や木が育つで有ふと思ふが、草木が有れば中に動物があるに違ひなひ、されは人間も住で居るに違ひなひ、そう云ふと星は皆世界かと云ふにそう云ふ譯でもなひ今云ふのは、太陽に隨て有る水星金星木星土星火星天王星海王星、ならびに我地球など云ふは遊星の上のことで有ります、此れ等の遊星が皆世界ぢやと云ことは天文學者の證明するところです。そこで一つの太陽に隨て有る遊星は親に子の有るやうなものでゝ、現今發見せし數は二百五十已上の諸遊星、并に多くの慧

星が有り、又恒星の方は自ら光と熱とを發する一の太陽であると云ふ、其の恒星の數も今日知れたるものは凡そ二千萬已上、此恒星にも又各多くの遊星があるとすれば、實に夥ひ世界であります、釋尊は三千大千世界、又は十方塵微世界と仰せられても眼鏡は御持ちはなひ、天眼通で御覽なされたぞや。さあ如是多くの世界これら大丈夫かと云ふに決して左樣ではなひ、なるほど此地球にしても我々の足で踏だ位では碎ける氣遣はなひ、されはどう碎ける、それは此世界が一時に碎けてなくなる、そして又新き世界が出來、此を御經には成住依空と說き玉ひて、世界は元より空ぢやが、その空なる所に衆生の業力より生ドて、業力が盡れは又碎けて空となる。こんなことは昔の人は信ずるものが少なかつたが、今では此說に疑がなひ樣になりかけた、依て西洋の天文學者の說に、未だ世界ができぬ間は

もや〳〵した空が滿てあると是を星雲と名け、又現に碎けかゝりて有る星もある、地球と同ト太陽にそふて有る海王星と云ふ星は、碎けかゝりて居ると有るが、これも現在眼鏡で見ることの出來るたしかなことで、終に釋尊の說を信ずるやうになりたぞや。そこで吾々の居る此世界は實におかしなもので、何でも皆な地へ落て來るか、又此世界はどこまでも掘れば土かと云ふにそうではない。今日本の下を掘り下れは凡そ三百年已前、伊太利ゼノアノ人コロンブスなるもの、一千四百九十二年十二月十四日を以て、初て太西洋の西に亞米利加なる國を發見した、此亞米利加へ出られるで有ると思ふが決してそうはいけぬぞ。この地球はぐるりが空で中にぶらりとして居るのぢや、そして一秒間にくる〳〵まはりながら二萬里の道を走て居る、實に奇態なものぢや、併しぶらりとして居るのを引張て居る

綱が有る、それは誰れが持て居るぞなれば、此世界に住で居る衆生が持て居る、其綱の名を御經には「カルマ」と云ふ、是は梵語で西洋の學者達は「エナージ」と云ひます。此綱は各何所に有ると思はしやる、それは吾々の心の中に有る卽ち業力で有る、其業力とは日々の所作のこと、此所作業の力で此世界を作り此世界に住で居る、依て業力次第で善き世界も出來れば、又つまらなひ世界を造ることが出來る、各何樣な世界を造る心算か、惡き世界を造らぬ樣に致ふぞや今吾人の業力が盡きれば此世界は一時に碎けます、所が此業力より造り出した此世界は滿足かと云ふに、決して充分な世界でなひ、ゆへに別に善き世界が有るに相違はありません、されば其善き世界又其善き世界へ行く道は、後席に於て辨ト致せう。

第十四席

偖て前席に引續き御取次に及ぶ、前談では萬法唯心と云ふことにつき善き世界を作らねばならぬと云ふをあら〳〵辯じました、各心と云ふものは宗教の御主を以て修めねばならぬ、若し心に於て宗教の主がないときは、心が亂れて身の行が修らぬでないか、それゆへ拙僧は心にまかしては立派な品行道德を修ることが出來まいと思ふ、各々は云何で御座る、今吾々が心で佛の御心の如く、慈悲と智惠との二をならべ清淨なれば、決して此世をそこなふことはありませんの然るに吾等凡夫の心はそんなに立派な心であるまい、されば此心はどんなものかしらべねばならぬ。先づ倶舍論によりますと、六識心王と四十六心所と合して五十二種の心を立てます、又唯識論では八識心王と五十一心所と合して五十九種の心を分ちますが、その心所をも大地法大善地大煩惱地などゝ分ち、大煩惱地法は惡の方へ飛で

行く心、大善地法は善に進み行く心、又大地法は何れにも隨ひますは是が內股膏藥と云ふ心であります。如是一々申せば中々一席や二席では咄も出來ぬが、此樣に云ふと各は奇態な心が起るでありましよ何に我は心は一つだと云御方があるかも知れんが、能く各々の心に問て見やしやれ、朝早ふ起て働ふと云善心が起れば、いやまて中々寒いぞまだ少し寢てやらうと云惡心が起る、終に十時頃ふとんの中よりはい出でゝ外へ出でゝ日を見れば、これはしたりとイヤもう暫くもかはらぬことがない、早起する心をば大善地法の中の動の心所と申してあります、横着な心を大煩惱地法の中の懈怠の心所と名てあります。其外種々樣々境遇に交る間に常に如是で、いや澤山な心が有りますぞ、各や我々は善心よりは惡心が勝を取ると云ふ鹽梅でありまする「心こそ心迷はす心なれ心に心こゝろ許すな」さあ各惡心

が勝を取りつゝ有るが凡夫ちやそ。そこで大經には「心常念惡口常言惡身常行惡曾無一善」と說せられ、又一つの經には「衆生一日一夜八億四千萬念、念々所作皆是三塗業」と說き玉ふ、されば心を主にしては三惡道へ落るより外はない。あの監獄の罪人は宗教の心なく、我が心を以て主とせしゆへにあの樣な苦みを受るのぢや、よう聞れよ三惡道の苦を受る人達は己が心を主とせしゆへぢや。各此本堂に參詣なさつた已上は、形が宗教の內へはいりたばかりでは所詮がないぞ、依て心を宗教の中に入れ信仰を以て御主となさねばならぬ、形には依らず心に依るものでありますぞ。あの孟効が語には「古への人は形禽獸に似て心に大聖德有り」と云はれたが、劉子の新論と云へる書の中におもしろき話が有る、伏儀と云ふ人は額に角があり、黃帝は龍の顏で有りたと、又堯王は眉に八つの綵があり、舜王

は瞳が二つ有り、禹王は耳に三つの穴があり、湯王には臂の曲が二つあり、文王は四つの乳があり蒼頡には四つの眼が有りと、皆是形は片輪に生てあれども、心に德が備へて有るゆへ、今の世の人達がみな聖人〳〵とほめるでないか、されば其心のすゑどころが大事ぢやわい。蓮如樣は「そのまゝ我心にまかせばかならず〳〵誤りあるべし」とも又「心にまかせずして心を責めよ」とも仰るぞ、さあ現今の人達の中には多くは形の有るものばかり重ドて、形のなひ方は輕ずるが困りたものぢやな。御祖師の御悲歎も全く是がためぢや唯身體の形有る方ばかり重ドて、形のなひ精神を輕くすとは、恰も金錢の尊きことを知りて、信心の尊きことを知らぬものが多ひぞや身體の勝れる人よりは形のなひ精神の勝れたのが拙僧は善ひかと思ふ、形の有る金錢よりは形のなひ信心の有るものが其益は多ひ、さ

れはその信心を貰ふには凡夫の心を以て定むるに非ず、各々や我々の心根を探りて見れば、おしや〳〵の貪欲やら惡や腹立の瞋恚やらあきらめのつかぬ愚痴の親玉やら、唯の一つも眞實の心はさらになひ、かゝる淺間敷凡夫の心を以て、幾億萬劫かけて思ひかためても たちはあかぬぞ、たとひ眞實心がたま〳〵起りたれはとて、水に畫を書くが如くあとより消へてなくなる。されはこそ佛道修行はもとより出來ぬ、眞實の心のなひ面々のことゆへ、我身は惡き徒者とりわけ作法もなき大罪人と見限をつけ、かゝるものを助け玉ふことの尊さよと、深く佛智を信じ大願業力の御力に任せ奉るばかりゝで往生は治定ぢやぞ、それゆへ凡夫の願ひ意は露塵程も雜へず、全く法體名號の獨り用にて有る。こゝを蓮如様は「信心をとると云ふも此六字のうちにこもれりとしるべし、されはさらに別に信心とて六字の外に有るべからざるものなり」と又「一流安心の體と云ふこと南無阿彌陀佛の六字のすがたなり」と又「信心と云ふはこの名號の六字のいはれをあらはせるすがたなり」と又「南無阿彌陀佛と申す體はわれらが他力の信心をゑたるすがたなり」と仰せられて有るからは全く他力御廻向の御信心にして、少しばかりも我等が願ひ意を間ゆるでなひ、無疑無慮乘彼願力定得往生と、我が計ひさらりと止めて大悲の御勅命を眞受にするが、佛法を心の主と貰ひ受けたのぢや。されば佛恩の深きを喜び生ては皇國の良民となり、死しては善き世界の極樂へ往生と現當二世の幸福とは云云。

第十五席

淨土眞宗に歸すれども止。偖て淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたしと云二句は昨日までに辨ずゝしたが、今日は下の「虛假

不實の我身にて、清淨の心もさらになしと云ふ句を御相談に及ぶ。さて虚假不實とは、虚は實に對する文字で唯外ばかりで内は實のなひからを云ふのぢや。あの虫の入た栗の樣なもので、上から見れば中々甘さふぢやが實は虫が食て中はからに成りて居る。今各々や我等は人間の皮をかついで居れば、上から一寸見るところでは實が有りさふに見ゆれども、表面ばかり内心は煩悩の虫食のからぢや。あの内の嫁と隣の嫁とが寄合ふと、婆さんのことばかり謗り話ぢやが又婆さん達が寄合ふと、あの内の嫁はなあ先日寺參りして歸りたところが、竈のそばでにぎり飯をこしらへて、いや食ふは〳〵七つ八つ辨慶もあきれるほど、それからどうしたそこで私がとん〳〵と足音をしたら、竈の前でかた〳〵と音がする。婆さんそれはまあよいが内の嫁は、ちよひ〳〵米や麥を内證實、それで御菓子を買ふて食ふ

「隱しても遂にしられる盗み物」私の賽錢のことは云へども其ことばかりはいはぬぞと、もう私は齒がなひで豆腐より外には食へぬと云はしやるが、嫁をかむ豆腐婆々、葬禮道具と婆さんとの氣隨は寺より外に置所なしぢや。それのみか我家へ歸へるとゐい〳〵もう此婆婆はいやぢや、早ふ死にたひ孫子の世話はうるさひ、早ふ御淨土へ參らせてもらいたいと云へば、嫁がこれお婆さん今死なしやつたら何樣なりましよ、まあ此世に少しでも居てもらはねばならぬ、此の子供の世話はとても私ばかりでは出來ぬ、せめてもう十年か二十年と云ふと、ホヽ嫁の云はるゝ通りと、同ト婆婆の人間ぢやで、分らぬ〳〵と莞爾と打笑、そして婆さんの腸底は私が死んだらどうしよぞ、内の嫁はまだ若ひて氣が付ぬ、私があればこそとイヤ用もないことにも氣をつける。又嫁どんの心の内はもう老ぼれの内の婆さ

ん、死に時が有る好加減に死でくれ、婆さんが死たとて内は何にも困りはせぬと、兩方共に木眞もものぢやなひ「虚くらべ死にたひと云ふ老婆止る嫁」あの辨慶は力の强ひ人で有りたで、今の小兒が辨慶と云へば恐れ機がある、けれども張拔人形の辨慶さんは、内に置たとて盗の用心にはなりはせぬぞ。今も在家衆は肩衣を掛け手に珠數をつまぐり、聞かずに聞た顔食はずに食た顔、見ずに見た顔信ぜずに信ぢた顔、貰はずに貰た顔、出家は衣を着し袈裟を掛けた所は、恰も昔の羅漢にも替らねども、表向ばかりで袈裟衣の働きもなく、見せかけばかりで内は御留守ぢやと云ふが虚の字のこゝろぢや。さて假は眞に對する文字でかりと讀む、最もかりと云ふ文字でも、借用の借の字のかりは長ふかると云ふこゝろ、こう云ふと借りて拂はぬ人が有るかも知れぬが、今は一寸かると云ふこゝろ、人間の形は

五蘊假和合と云ふ如くぢや。たま〳〵御法座へ出たときは有難ひやうなれども、我家へ歸ると打忘れて水に繪を書く樣な我々ゆへ、虚假不實の凡夫と云ひますぞや。次に不實とは表裏の有ること、大經には「表裏相應」と裏表がなひことぢやと御説なされた、今は表裏の有ること、あの蘧伯玉と云ふ人は、闇夜に車に乘て我君の門前を通るとき、車より下りて禮拜をして通られた「闇なれど拜して通る恩の門」又子路闇室にも冠を正す、心有る人はくらがりでも禮儀を正す、然るに我々は何事に依らず陰陽表裏が有る、たま〳〵後生が大事と思ひ、御恩は有難ひと思ふ心は起ても跡方なく消て仕舞ふ、是を不實と云ひます。我身にてとあるは、祖師の御自身を御指なされた御言で、是を親鸞が身は八家九宗の其中で、今聖道門をさしをき易行他力の淨土眞宗に歸するは歸したれども、未來の一大事のこと

が飛び立つ程の思ひはない、虚假不實の我身にて、姿形は袈裟衣を着して珠數をつまぐり殊勝らしゆ見ゆれども、内心は不實でうらをもてが有る、それゆへ雑行雑修の修行をして成佛せんこと思ひもよらず、其方どもゝ自力執情をふりすてゝ、他力本願を頼めよと有るが此御味ぢやぞや。たとへば泥の中に落たものを助くるには、我身も泥まびれにならにやならぬ、井戸の邊たに遊ぶ子供があぶなさに母親が井戸を指のぞひて、そりや是の中から恐いものが出ると、口をあけて見せるでないか。今も其如く煩惱惡業の泥まびれの我等がために、祖師聖人が虚假不實の我身にてとの玉ひ、泥の中の我等を極樂淨土の彼の岸へ、御引なされんためにとて、愛妻愛子の泥まびれになりて御見せなされた、はや既に御和讃にも「聖道權化の方便に、衆生ひさしくとゝまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一

乘歸命せよ」とありて、聖道自力の法門は末代の凡夫はあぶないとて、御祖師は彼の叡山で二十年の其間、聖道修行はなされて見たが定水を凝すと雖も識浪絶間なく動き、心月を觀念すとも妄雲猶覆ひ亂想を靜んとすれども、見るにつけ聞くにつけ六識八識と動き出し眞如の月を眺めんとすれば忘念の雲頻りに起り、とても是れではかなはぬと自力門にうろたへて居る、我等を連れて歸らんとて、二十九歳の春の頃二十年骨折つた聖道門を御捨なされ、吉水の法然聖人の御膝元まで逃げて御見せなされたぞ。子供に物を食すにも親が口をあけ、そら食へと云ふ如く、南無阿彌陀佛の御六字は惡人女人が御淨土へ參らせ貰ふ寶ぞと呑み込ませんためにとて、虚假不實の我身にてと仰せられた、それゆへ各や我等が往生一定と、何の不足なく領解が出來ることぢやぞや。祖師御自身から虚假不實の我身にて

と、打出し手を取て引きくゝめる樣に敎て下さるのを、また御六字ばかりにては覺束ないやうに思ひ、諸善萬行に心をとゞめて、とひ立つほどに念佛をとなへて嬉しふなりてこそと、祖師の敎をもどひてかゝる同行は、誓願不思議の御由れが知られぬからぢやぞへ。あの莊子の中には「飲鼠浮海不遇沸腹」と書て有るが、腹のふくれた上は外の食は見ともなひ、彼れ此れと不足を云内はまだ腹に足らぬから、今も往生一定の腹がふくれたらは、何の不足有てか諸善萬行に心を止むべきやで、雜行も自力も望はなひ、手を動したひ足が達者になりたひとて、手足に飯をくわす馬鹿が有るか有りはすまひ。今も御慈悲の程が嬉うなひ喜ばれぬ、寺參りが根から出來ぬと悔むより、一念歸命の御謂を御聽聞致すがよひ、本家の信心をさしをいて參られぬ喜れぬと云ふは、手足を働さんとて飯を手足にぬる

やうなものぢや。それより虛假不實の我身にてと打出して、末代の凡夫心配するな案ずるな、參らすぞ助くるぞ救ふぞと、喚で下さる勅命が聞へたまゝ屆たまゝ、安心するなり落付なり、虛假不實の其儘で、自然と御慈悲が有難喜ばれるぞや。

第十六席

偖て前座より御相談に及ぶ、凡夫の心は穢惡汚染虛假詔僞、けがれけがれた惡穢なひ心中にて、虛やら僞りやら詔やら眞の者は一つもないぞ、たま〳〵人の世話するにも初は親切らしふ見せても、己が心に離れぬのは欲の一つである、これだけしたならこれたけのことはしそうなものと恩にきせて世話をする、實にけがれ〳〵た性根ぢや。恰も炭や灰を洗ふに體は盡きても濁りはやまぬ樣な心なれば、清淨の心もさらになしと仰る、今御信心も其如くで、得ずに得た顏

貴はずに貴た顔、此樣な人達を曇鸞大師は「不如實修行」と仰る、其不如實修行とは常に稱名憶念すれども、御本願を疑ふ行者は阿彌陀如來の眞實の御心にかなはぬゆへ、如來の眞實の如くでなひと云ふことぢや。表向は信者らしゆ見せかけ相形は殊勝に見へても、唯上べ計りの化の皮、内はさッぱり御留守ぢや「句をは問れて困る作り花」是を蓮如樣は「まぎれ〳〵て日々に地獄が近くなる」と仰るぞや。さあ各御由斷なさるな、此世五十年は紛れても臨終捨命の夕には紛れものが現れるぞ、「不如實修行と云へること、鸞師釋しての玉はく、一者信心淳からず、若存若亡するゆへに、二者信心一ならず、決定なきゆへなれは、三者信心相續せず、餘念間故とのべ玉ふ」さあ各此三不は自力の信心、一に信心淳からず、二に信心一ならず、三に信心相續せず、此三不はみな收めて見れば疑の一つであ

る。其一者信心淳からずとは、己がこゝろを定めて見ても惡ひこゝろが起てくれは、こんな心で行けまひかと思ひ、やさしひ心が起りてみれは是でこそ行けやうかと、若存若亡するゆへに淳からず、淳からずとは贋物ぢや。二者信心一ならずとは、助正間雜し定散心雜るがゆへに一ならず、三者信心相續せずとは、昨日は往生一定參られそうに思へども、今日はこれではゆけまひと不定の思か不相續「うきぐさや昨日は東今日は西」上べばかりが信心不淳、替り通しが信心不一、相續せぬのが不相續、是を三不と仰るぞへ。併しながら三信は此裏で他力の信心、其他力の信心とは、一には淳心二には一心三には相續心、斯樣に三つあれども縮めてみれは一心の外はなひ。そこで先づ初に淳心とはあつひ信心と云ふこと、あつひとは稱名の功をつんであついと云ふには非ず、淳とは漆をぬりたり蒔繪を

書た重箱の如き、後ではげるやうなものでなく、山より伐り出したまゝの木にて、けづらずみがゝぬを淳朴質朴と云ひます。今も其如く地獄這出の山出しの儘、祖師善知識の御教化にて、御本願の手強ことを信ずて、行者自力の漆や蒔繪、かざるはからひ更にやめ、すなほに受くるが淳心と云ふ。二に一心とは、無疑決定の義ぢや。これを銘文には「一心と云ふは教主世尊のみことをふたこゝろなくうたがひなしとなり」と仰るぞや。三に相續心とは、昨日も今日も往生は一定と、前念後念相續して他想間雜せぬを云ふ、然るにこんな懈怠勝の凡夫に、他想間雜せず晝夜思ひつゞけとは御無理ぢやないかそれは各心配さッしやるな、思ひつゞけにはならぬけれども、いつ思ひ出しても心かはらず往生一定御助け治定と、腰のすはるが相續心と云ひますぞや。

あの床飾りの自然木の虎は、洗ても日が立てもはげることはなひ、かへつて光澤を增す、然るに製造物の虎は漆でぬり其上に色取ぢやで、永らく持てば表の色どりやら漆がはげて見苦ひぞや。今も他力御回向の自然木の御領解なら、妄念煩惱の水に入れても、なを〳〵領解の光澤をまし、年がよるに順ひて目は見へず耳はきこへず、手足は不自由な此體の地躰は古ふなりても、相續の光澤はいやましに昔にかはりはせぬぞ、其信心は「問われても云はれぬ花の匂かな」これ本願に歸すれば、生れ付の不實は却つて清淨眞實が入滿て下されてこそ、山家の小屋にひとりこッそりと住んでも稱へらるゝ、人の聞く聞かねに依らず、陰陽なく夜の寢のうつゝにも南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と御恩が喜ばるゝ、是れ不實の裏にて清淨眞實の御信心の御働きとや「ひつそりと跡に秋有るおどりかな」さわ〳〵踊りに

あるく間は秋も知らねども、をどりもやみ我家へ歸りて物のさびしさに秋を知る。今御信心を得た人も法義の席、同行會合の座ではさほど御恩も思はねども、獨り我家へ歸りて思ひまはせばまはすほどさても〳〵阿彌陀如來の御慈悲なればこそ、かゝるものが極樂參りと、はれ〳〵と御恩の程も喜ばるゝぞ、是全く不實の我等に如來眞實の御眞が屆て下されたのぢや、それゆへ眞實の信のおはたらきで虛假不實の我身が、是のまゝ往生を遂るやうになつたのぢや。次に清淨の心もさらになしと、是れ下化衆生の心で、清淨の裏は不清淨不清淨の心は私欲と名けて、儒道では人欲の私と誡め、俗には身勝手と云ひます、世間の難義はかまはず我さへよければよいと、身勝手を思ふが不清淨と云、佛法では通ト て不淨心を誡る、菩薩の六度萬行の修行の中にも、第一に布施の行を修せねばならぬが、是の布

施にも、二種あつて、一には法施二には財施、僧分は法施を重ト財施を輕くする、在家は財施を重くして法施を輕く受くるが法の規則ぢやぞ、然るに今は道俗ともに大に誤りを生ト、出家は名利のために法施をけがし、聖人よりあづかりし門徒が現世祈して惡道へ落るを見ながら、強く誡めたら門徒の機嫌がそこねて志もあげまいかと、名利のために己が役目をけがし、如來聖人に血の涙を流させ奉る是を法財と云ひます。古人の語にも「國に功なく民に德なふして、花衣美食せば盗と何ぞ異ん」と云て有る、世間に功なく德なく衣服を飾り美食を好むやからは盗賊と云ふてある、僧俗ともに愼まねばならぬことぢや。古人も厚顏鐵面皮と云て厚ひ顏の皮ぢや、鐵の面を着たやうなと誡た、今も我々が利欲に迷て居る有樣は、鐵の面でも着ねば佛祖の御前へ出られぬぞ、是を清淨の心もさらになしと御意

なされた、然れば各誤り入て御本願の御不思議を信ず、打驚ては懺悔の稱名。

第十七　席

淨土眞宗に歸すれども止。偖て引續て御取次を申し掛けた御和讃、清淨の心もさらになしと有るに就て、昨日は我等が身勝手を云、不淨心は有ても下化衆生の清淨心はなく、僧侶は衆生化益が役目なれども名利をむさぼり、少も法施を致す心の少ひ出家分のことを云たが、御同行方は大な顔をしたで有ふが、今時の在家には油斷がならぬ、たま〳〵志をしても名聞利養がさきに立つ。全體旦那と云ふは梵語にして、漢語には布施婆羅蜜と云ひます、今でも門徒より僧侶へ志をするを御布施と云、然れば旦那は寺へ金銀を持運で寺を相續せねばならぬもの、又僧分は門徒へ法施をなして化益するが役義ち

や。然るに當今は僧分の貌を見てやれ困りたことや又無心云ふて來たさうな、寺の奉加に困ると云て親の代に上げた事までくり出してくどく云ふたり女房に留守ぢやと云へと言ひ聞し裏からそつと出ぬけたりする性根で布施婆羅蜜を名としたる旦那と云はれたるものが借りた錢を返すにさへ仁王樣が煎振の三四合も飲んた樣な顔をしてぐずり〳〵と出しかける又それのみか借りながら拂はぬ人達が有る是等の人は畜生よりもまた劣るわい。弘法大師は「名聞の千金は髮をなでるより易し、慈悲の一錢は爪を離すより重し」と云はれた、女中達の頭の飾りには二圓や三圓金が入りたとておしまず、男子は時計や帶やこんなものにはたとひ十圓が五十圓でもおしまず、物見遊山には人に負けまひと衣服を飾り立ておしまねども、一厘でも下されと後から付て來る乞食には、ないぞ〳〵と二丁三丁引づりある

き、其あげくにはひッこいやつぢやと云ひつゝ一厘打つけてやる、我身さへよければ人の痛さは何年でも辛抱すると云ふ樣な有樣は、生ながら獄卒の交りも同前ぢやないか。然るに物をやるばかりが慈悲とは云はれぬ、人の憂を見ては共に憂ひ人の悲みを聞ては共に悲み、たとひ役に立ずとも力となりてあはれむ心を無畏施と云ふぞや丈夫論の中には菩薩は乞食の聲を聞て之が爲めに涙墮つと有り、古歌には「門に立つ物乞ふ聲を聞ならば哀れと思へ物をくれずとも」と有り、又江州平田の明照寺は門徒六千三百餘もある大寺ぢやとか、此寺の中興の院寺は芭蕉の門人で其名を梅室庵李田と云、俳道の達人で有たが、其句に「乞食の聲に寢られぬ寒さかな」とよんだ、屏風を引廻し蒲團を重て寢てさへ此寒ひに、さぞや乞食は野や山に寢るは實に寒からふと云て寢る夜は、いとゞ寒さが身に知れたと云ふ

こゝろ。今時の道俗は其身の榮耀にはこれども、難義して苦む乞食を見て涙一滴こぼしもせず、たま〳〵表戸口に立ては目を四角にむひて追拂ひ、心からあのざまぢやとやらぬのみか耻を與へるやうな根性で、下化衆生の清淨心が有ると云はれやうか、萬劫へても佛果に至るべき種はないぞや。然るに破邪顯正抄には「曠劫流轉の間多生沈沒のはゞ、善根薄少にして未た火宅を出ざる所に、たま〳〵南浮の人身を受け、幸に西方の佛敎に値へり、此故に生々に受けし六道の生よりも、此度の人身は尤も喜ばしく、世々に被りて國手の恩よりも、此所の皇恩は殊に重し」と仰る。さあ各々や我々は二十五有界、迷ひ迷ふた其中で佛法に廻り値たは今が初め、手に珠數かけて寺參する身を生で貰ふたも今が初め、祖師善知識に値たも今が初め、阿彌陀如來の大悲誓願を信ずるは今が初事、南無阿彌陀佛の御

六字が胸の内に信ぜられたら、光明攝取の大益を蒙り、現に正定聚の分人ぢやぞ、されば本願を信ずる行者は願作佛心はこれ、度衆生の心なり、度衆生の心はこれ利他眞實の信心なりとあれば、自信教人信の利益より本願の不思議にて往生を遂ると、我も信ド不法義なる人を見ては氣の毒に思ひ、何でも此の有難ひ法を聞かせたひと思ふ心となさしめ玉ふ所が、取もなほさず下化衆生の清淨心と云ものぢやぞへ、發句にも「筍にぬぎ捨てられしかたつぶり」ほしい惜いは我等が持前にて、一錢半錢も施す心でなけれども内に、信心増長するに隨て佛のことが大切に思はれて、法義の爲めには力を盡し人のためには身を忘ると云ふ樣な心になさしめて下さるゝ、歌にも「起てあす人やうらみん郭公我のみ聞て驚かさすば」夜の寢めに郭公の聲をきゝて思ふには、昔の人は「行やらで山路くらしつ郭公今

一聲のきかまほしさに」いばらからたちわけ登り、日の暮れるもいとひなく難義して聞しに、寢ながら聞くことの嬉さよと、妻子起してきかさず朝になりて話をしたなれば、さぞ殘念と恨やせん、起して機嫌惡くとも、郭公の聲を聞かさずには置かれまひと、ゆすり起して聞せたる歌の心。今もたとひ大千世界にみてらん火をもすぎゆきて、聞べき超世無上の法門を、今骨折らずに聞くことの嬉さよと、妻子に聞そうと思へども、無明煩惱の寢入最中、それゆへ氣には入るまいと捨てゝ置けば、さぞや未來地獄に墮ちたときうらみに思ふで有ふ、さればすゝめて機嫌惡くとも、是本願の御不思議が聞かせずに置れぬと思ふこゝろは、取りもなをさず佛智不思議で、上求菩提の眞實心、下化衆生の清淨心、悉く滿足するは御本願の御手柄よと御恩の稱名。

第十八席

偖て各々詣つて聞かざるはなし聞て信せざるは危いぞや、されば御當流では聞が肝要ぢや、其聞に就て天台大師の摩訶止觀の中には、三種の器が有ることを載せられた。一には覆器是は器物に物を入れるに、うつむけになりては物は入らぬで有ふ、佛とも法とも心にかけず更に聞く氣のなひ人には、何程云ふとも仕方がなひ、こんな人達の耳は鐵砲耳と云ふで有ふ、一方より聞けば一方へ拔けて飛でしまふ一つも利益がなひぞ、是を蓮如樣は無宿善の機に至りては力及はずと御歎なされた。二に漏器と云ふは德利は酒を入れる道具ぢやけれども、底がぬけては何程入れてもたまらぬわい、千座萬座の御化導に遇ても、後生大事と云ふ底がぬけた同行は御信心の酒はたまらぬ。加樣な耳を籠耳と云ひまして、水の中に有る間は水かたまりて有る樣ぢやけれど、上へあげれば水はなくなる、此本堂の內に有る間は信心の水が有る樣ぢやが、我家へ歸て見ると颯張元の通で家內喧嘩が初るぞや。三に穢器と申すは是は穢れて有る器のことで、清淨の水を入てもすぐに穢れてしまふ、異學異見の人々やら、因果撥無の外道の類の心は、清淨な佛法の道理を聞ても直に穢れますが是れは穢れこそあれ洗ひ清めさへすれば元の如くなる、此耳は上かん屋の笏耳と云ひ、洗ひさへすれば他の清淨な水もくめる、併し第一の覆器の如きはうつむけて有るだけで、おこしさへすれば物は入るが、仕方のなひは第二の漏器で此を蓮如樣は深く御嘆きあらせられ「いかに不信のものたりとも聽聞を心に入て申さば、御慈悲にて候間信を得べきなり」と仰る、されば聞て御吳れや御祖師は「聞佛願生起本末無有疑心是曰聞」と仰せられた。全體在座の我人

には眞實の心ぢやの、清淨の心ぢやのと云ふことは微塵ばかりもなく、不實不淨で煩惱具足の此身ゆへ、十方の諸佛は身をふるひ立て必墜無間とのいて御仕舞なされたれども、阿彌陀如來は其ものを一番がけに助けふと云ふ御本願ぢやぞ。諸佛と阿彌陀佛とは目の付所が違ふ、諸佛は不實にして僞りかざりの疵が邪魔になるとて御捨てなされたが、阿彌陀樣は虛假不實にして清淨のなひ疵は御合點で、信心の藥を與へて似せ僞りを大悲の方から、療治して助けふと云本願ぢやぞや。

先年有る里の一人の男が一軸の掛物を懷中して、所々の古道具屋へ賣りに行しが、何れの道具屋も開て見て是は似ものぢやとて一人も相手がなひ、然るに高松市に源平と云目き丶上手が有りた、右の男源平の方へ行て右の一軸を取出し、是は家に傳りた重寶なれども、

家貧にして難義ゆへ詮方なく賣拂はねばならぬが、何卒高價に買て下されまいかとあれば、源平とくと見ていかにも高價に求めましよとて、二十圓出して渡されたれば、男は金受取て歸られたが、其翌日古道具の仲間其樣子を聞付け、何れも同道して源平が方へ來り、承れば昨日男が持て來た掛物、定家の正筆ぢやとて二十圓に買はれたと云沙汰で御座る、いよ〳〵で御座るかと尋ねたれば、成程拙者が二十圓に求めましたと申されたれば、道具屋共さて〳〵ばらい智慧者にも誤りが有る、貴殿の樣な目き丶上手があの似物にだまされたか、拙者は無功者ながら一寸見ても似物ぢやと思ふたに、それを貴殿が眞正と見たはどうして目が闇んだぞ、日頃に似合ぬと云はれたれば、源平少も驚かず成程何れも申さる丶は道理ぢや、然るに貴殿方は中の文字や印の贋物ばかりに氣が付て、はたの表具に氣が付

ぬからぢや、成程中の筆は贋物なれども、飾り表具が結構な品、古渡りの古金襴外にならびのないものぢやで、只今賣ても三十圓や四十圓には氣づかひなしに賣れる、それゆへ拙者が二十圓出したと云はれたれば、人々横手を打て天晴の目きゝ上手ぢや、中々我々が及んだことではないと贍をつぶしたと云ふが、何事でも人に秀でたものは格別なものぢや。今我等が身は奸詐百端虚偽諂曲の似物なるゆへ、十方諸佛ぞなたを頼でも無有出離之縁と受取りてのない捨りものを、阿彌陀如來樣は我獨り救はんと云ふ大願を起しまし〳〵て、眞實心や清淨心のない贋物御合點で御請込みなされた。彼の源平は中は贋物なれど表具が目當に買はれたが、阿彌陀如來は我等が胸の内は贋物なれども、一念歸命の御信心の表具を御目當として、惡人凡夫をこの身このまで御助け下さるゝぞへ。然れば行者の方からよ

からんあしからんとはからふは大なる誤りでとちやほどに、贋偽りを有りのまに打出て、かゝるものを御助けの本願よと脇目をふらず御慈悲にまかせ奉るばかりぢや。我等は淺間敷ものと見限り、加樣なものを御助けの御慈悲よと、一念無疑に歸命し奉り、往生一定御助け治定と、御領解の上は御恩の程を思ひ出し、報謝の稱名御相續が何より肝要。

第十九席

外儀のすがたはひとでとに　賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪僞おほきゆへ　奸詐ものゝはし身にみてり

今日より第二首目、外儀のすがたは人でとにと有る讃を御相談に及ぶ、時に上の和讃は虚假不實のわが身にてと、祖師聖人御自身に就て悲歎なされ、今の讃もやはり御自身の悲歎なれども、兼て今日在

座の面々を攝し玉ひて、内外のそろはぬことを悲み玉ふことで有る
先初に外儀のすがたはひとでとにと云ふは、外は外相のことにて内
に對する言、意に思ふを内と云ひ身と口とに顯はるゝを外と云ひま
す、儀とは威儀と云ことで身の持ち樣のこと。さてすがたと云ふは
文字に直すとすがたの字數々あれども、今のすがたは態の字を書ね
ばならぬ、態の字はわざとも讀でしかたと云心、これを御文章の上
で頂けば「南無阿彌陀佛のすがたを心得るなり」と有るも、南無阿
彌陀佛で凡夫を佛にする仕方をこゝろうることぢや。次にひとで
とにとは毎人と書て、誰でも仕方身の持ち樣を外へ見せるは、賢善
精進のあッはれ者ぢやと見せるけれども、心の内は貪瞋邪僞胸に滿
てあります。もゝはしとは百端のことにて多端と云ふに同く、彼れ
につけ是れにつけ作ること、なすことちら〳〵惡いことが見はるぞ

と云ふこゝろぢや。已に善導大師も散善義には「不得外現賢善精
進之相、内懷虛假貪瞋邪僞奸詐百端惡性難侵事同蛇蝎」
雖起三業名爲雜毒之善亦名虛假之行不名信實業也」と御
意なされましたが、今日我等は殊勝げに姿はつくろへども、恰も猿
に上み下を着せたる如く、鬼に衣を着せたる如くである。昔杭と云
國に一人の商人有りて、能く橙や橘の如きものを年中たくはへ、是
を市中に出でゝ賣れ出他になき時節のことにて、價十倍にしても人
は爭て是を求め居りしが、然る所或人是を求めしに唯煙のみありて
ぽッと口や鼻を撲つばかり、其中を能く見れば乾きて何もないゆへ
怪で、是れ商人貴樣は人を欺くかと云へば、商人笑ながら云ふには
決して欺くに非ず、我是を賣ること數年の間にして我妻子をやしな
ふなり、吾是を售へば人是を求て不足云ふことはない、然るに貴殿

は充分になきや、マア世間に人を欺くもの澤山あつて、表向は金玉の如くなして其心は腐りて有ること、此橙や橘の如くなりと云はれたれば、右の人一言も出すことが出來なかッたとあります。さあ各我等は姿形ばかりが美く、心が貪欲やら瞋恚やら愚痴やらで、只まがりいつはるばかりではありませぬか。然れども阿彌陀如來は姿形は御嫌ひはないぞ、是を御和讃には「彌陀の報土を願ふ人外儀のすがたはことなりと本願名號信受して寤寐にわすることなかれ」との玉ひ、御文章には「外儀の姿と云ふは在家出家男子女人をゐらばさる心なり」とも仰せられた。されば姿形は云何樣でも一念歸命の信心一つで極樂へ參れるぞや、此を最要抄には「わがかしこくて信ずる信にあらず、聞其名號と云聞は、善知識にあひて如來の他力を以て、往生治定する道理を聞き定るの聞なり、其名號の謂れとは蓮

如樣は「南無はたのむ機の方なり阿彌陀佛は助け玉ふ法の方なるがゆへに、機法一體の南無阿彌陀佛なり」と仰せられた、よッて南無はたのむ機、阿彌陀佛は助ける法、按ずるな心配するなが南無の二字、おさめるぞたすけるぞすくふぞよが阿彌陀佛、疑ふなが南無の二字、往生さすぞが阿彌陀佛、南無は衆生がたのむこと、阿彌陀佛はたのむ衆生を助け玉ふ佛け、たのむと助けるとの約束が出來たのが南無阿彌陀佛と云ふ御本願、其本願の誓通り出來上たが南無阿彌陀佛の名號である、へにたのめ助けるが御勅命、そこでたのむ衆生を助け玉ふが阿彌陀佛、たすける彌陀をたのむが南無、彌陀をたのむが衆生、たのむ衆生を助け玉ふが阿彌陀佛、法から機に向ふときはたのめ助ける、機から法に向ふときは御助けをたのむ。それはどうたのみます、御助け候へとたのむ、たのむとは願ひ込むでも祈込

でもないぞ、阿彌陀如來の御助けを受るばかりぢやぞや。向より助けてやらうとあるまことを聞て、疑晴るゝこと信ずること、眞受にすることまかすことすがることと、ソコデ疑はぬと信ずるとたのむと言はかはれども皆同ドこと、依て蓮如樣はたすけたまへとふかく心に疑なく信ドと、同ドことを能く我等に分る樣重々に仰せられた。されば彼より發願廻向やらうと有るのを、善知識の敎の下で受る一つが一念歸命、これをくゝりてたのむと云ふは、唯是大悲の勅命に信順する心なりと仰るぞや。御同行能う聞うぞ小言を言て吾心にこたへのある間は眞實ではない僞物ぢや、たとへばいたむによりて齒をおさへ、痛に依て額をおさゆる如くで、至心信樂己を忘れて、無行不成の願海へ、かゝる機までも此儘乍らと歸するのは、吾心にこたへのなくなりたのぢやぞ、然れば己を忘るゝどは性根なしになるのかいゝら、阿房になるかいゝら、我手元を打忘て只一向に大悲の御手元に目の付たこゝろ、是を善導大師は「二尊の敎勅に信順して、水火二河を顧みず」と仰る。あの世に名高き加賀の千代女が、善見律と云ふ書の中に、煩惱の犬はうてども去らず、菩提の鹿は招けども來らずと云へる語によりて、煩惱の蚊はうてども去らず菩提の螢はまねけども來らず、さらば團扇をなげすてゝと前書をして「ありがたや他力尊し蚊帳のうち」と讀れましたが、自力の團扇をうちすてゝ他力の蚊帳に入てこそ大安樂ぢや。併し蚊帳の中に入るには「貴人でもかゞんで這入る蚊帳かな」自慢高慢の高鼻で、得ずに得た顏するどはない、我本心に得たつもり頂たつもり信ドたつもり、加樣なつもりをさらりとやめ、興へて御吳る御六字を押頂て喜ぶばかりぢや。世界中で一番鼻の低い人種は誰で有う、日本で鼻が別に

低い鼻が有たら「親の目を盗んだ罰で鼻が落ち」まるでいろは喩の繪に書て有るかッたいのかさうらみ、處が鼻のつぶれたのを好き男子とするのが、あの南洋のタヒンナと云島でありますが、此島では鼻の低いほどよい、ゆへに小兒の中からぜッせと鼻をおしつぶす、その土人が歐羅巴人の子供を見て、可哀さうたあの子は母が育て方を知らないものだと云ふさうな。今彌陀の御慈悲に向ふとき、自慢の鼻の低いのが極上品な妙好人、若も鼻が高ければ御開山や蓮如樣可哀さうなものかなとさぞや御悲歎なさるを有う程に、いよ〳〵我身を誤り果てゝ、廣大甚深の御慈悲を仰ぎあげては南無阿彌陀佛。

第二十席

偖て前席に引續き御取次に及ぶが、古語にも「山高きが故に貴からず木有るを以て貴しとす、人肥たるが故に貴からず智有るを以て貴しとす」長吉が下女のおまつに向て、これおまつ顏に墨が付てありますぞへと云へば、長吉さん御前は格別心切なものぢやと喜び、若しおまつどん心が少しゆがんで有るから直しなされと云ふたら、四角な目を八角にむいて、何ぢや己れの心がどうしたと、形は目にかゝれども心は見ぬぞや。羽織の紋が少しいがみてある、これ直して上ると云へば禮を云ふ人もあるに、心がゆがんで居るから直してと云ふたら禮を云ふどころか、にわかに顏が七面鳥大な逆事であらうぞ。外儀のすがたは如何樣でも、內に信仰を心の主とするときは此上もなひ仕合ぢやぞ、依て般若經には「心をして己に隨はしむるとも心に隨て行はざれ」と、各何が大事と云ふても命程大事なものはなひ、併し命より大事なものはなきやうに思へども、それより大切なものが有る、何所に有る自ら身に付て有る、それは何ぢや心靈

なり魂なり是が一番大切ぢやわい。其靈魂なるものは肉體の外にありて、是が展轉して生れ未來の禍福を得ると云ふのか、是は如何な由けでありまず、されば靈魂と云ふは佛教中には心識と名けます、此心識を御話致せば、甚だ精密で六識とか八識とかの區別がありまず、其六識とは眼耳鼻舌身意で、八識とは是に末那識と阿羅耶識との二を加へます、此等はみな心の體に就て分けたものですが、此等の識に隨ひ伴ふて澤山な心所法なるものが有り、各知覺が有て心識と同時に其働が發るゆへ、僅か喜だり怒たりの思を發すにも、最も緻密な關係があるが、今此等のことを委く辯ずるに遑がありません各々我々の體筋とか骨とか皮とか肉とか是は形の有るものにて、知覺とか思想とかの働の有る心識とは、其性質が違てあります。然れども人初て生れた時知覺がなひ樣で、漸く身體が成長しますと、それに隨て知識も次第に進みますが、若し老人となりたるときなどは心識の働も共に劣へる、此は全體どう云ふことかと云ふに、此體と心識とは殊に親密な譯が有て、縮たり暢たり共に致します。先一番に心識の働を發すに必ず依るべき一つの法がありますが、是を印度語では根と名け、是は力用が有て色々の働が生ずると云ふことにて眼識は眼根を依り所として五色を見分け、舌識は舌根を依り所として味を知る、舌は利口なもので舌に上ると色々の味が早く知ることを妙で有ふ。鼻識は鼻根これも能く知る、身識は身根に依て寒暖冷熱を知る、ゆへに此根がなひときは心識が頭を出すことが出來ません少しばかりの欠點がありても心識の働が明かにありません、老人が眼鏡を餘けて見る時は見ることが出來ぬ如くで、此根と云ふは神系纖の類を云ひますぞや、併し皆さんや我々が死で此體がなくなりて

も、靈魂即ち心識と云ふものは獨り滅せずして、他の所へ生れて又新に身體が出來るとは實に疑はしいことぢやが、此事を御話致すには意を靜にして聞て御呉れや、さなくば大に謬ることがあります。是には生滅門と不變門との二つが有ります、其生滅門とはすべての物常住でないと云こと、是は物や心の相について云ふので、不變門とはすべての物常住變らざるものを云ふ、是は眞如は不變のゆへに常住と云、恰も水と波の如く、波は風の縁に依て起る時も有り又滅する時も有る、然れども水の體はやはり水で有る如く、水をはなれて波なく波をはなれて水はなひ共に相はなれぬものぢや。今萬の物は波の如く眞理は水の樣なもので、二かと思へば一、一かと思へば二であります、依て波は悉く水で別に波と云ふものはなひゆへに常住と云ふ、然れども波の邊を云ふときは、一滴も皆波にして別の水

はなひ是れ常住とは云へぬ。今も其通りで物と心との二は常住とすれば常住とも云ひ、無常とすれば無常と云ことが出來ます、そこで肉體ばかり滅して心識獨り滅せんとは云へまひと、若し靈魂と云ふ常住の物が有て、死で未來へ赴くことは、鳥が籠の中から飛だ如くなりとするときは誤りと云ふものの、今身も心も共に滅すとは雖も、三世因果の道理が有るぞよ、因縁によりて物と心と悉く共に生滅がありて少しの間も存せず、そして一秒間も止るものはなひ、此一刹那の間に自ら前因が後果をまねく勢がありまして、つゞき〳〵て其生滅の早ひことは各や我々は知らぬゆへに、いつまでも同物が有るものと思へり、然るに少年の時の身や心は成年の身や心でなひ、老人の身心と壯年の人の身心とは同ト事ではなひ、去年と今年との身や心、昨日と今日午前と午後と身も心も共に別にして、少しの間もか

はりてあります、百年の間た壯年で貫くものは有るまひ、こゝらを無我と云ひますぞや。今未來と今生との關係も今日と明日の關係も同く、にはとりの羽たゝきが今日の部分で、コケコーと歌ふたが明日と云ふか一刹那の間のことぢやぞ、昨日の身や心を因として今日の身や心があり、今日の身や心を因として明日の身や心を生ずる如く、此世の身心を因として未來の身心の果を感ずることぢや。各まかぬ種ははゑぬと云へる諺を能く知りて御呉れや、因果の力が相牽て個々別々の象が現れ、展轉して止むことは決してなひぞや、こゝを道綽禪師は安樂集に「淨土の假名人穢土の假名人決定して一なることを得ず、決定して異なることを得ず、前心後心も亦復如是、何を以てのゆへに若し決定して一なる則は因果無けん、若し決定して異なる則は相續に非ず」と仰せられたり。かく因果相續して絶ることなき所以は眞理の現れなるゆへぢやぞ、ゆへに經論の中往々心相は滅すとも心體は滅せずと說てあります。唯今までの如く申すと身も心も同く未來へ行くかと云ふ疑がはなれぬが、そこで性質は共に刹那の生滅にして、物と心と全く同きなり、然れども因緣に依て同ド動物でも蜉蝣かけろうは一日一夜、蟬は三十日螢は二十八日、猿は百年とか鼠は三年とか云ふ如く、心は肉體を現す本なれば少も斷へずして遠く三世につゞき、肉體は心によりて現れたものなれば、其相續するのが近く一世に止る、されども其心識のみが未來にありてころ〳〵と有ると云わけではなひ、心が有るときは體又現れるが、今生と未來との肉體は其類の異なるを以て、前の者のつゞくと云はぬだけにて、其實は刹那の生滅なれば滅せんとも云へず、又轉ドて生るとも云べきに非されども、相續して現れる上について暫く轉生

と名をつけたのである。常住つゞひて少の間もたへぬ心識を阿賴耶識と云ひ、眼や耳や鼻や舌やなどは、時々たへるものにて物を見ぬ時は眼識は發らず、聲を聞かぬときは耳識もなく、ねむりて夢たに見ざるときは意識も滅せり、唯阿賴耶識のみ存すと云ひまして、つまり靈魂は滅せざるものぢや。されば置き所が肝要でないか、貪欲によれば獄地瞋恚によれば餓鬼愚痴によれば畜生、各何によりて日暮して居るぞや、五戒によれば人間十善の道に依れば天、四諦によれば聲聞十二因縁によれば緣覺、六度萬行によれば菩薩と、こゝを正法念經には「非異人作惡非異人受報自業自得果衆生皆如此」と、されば今日我々は何の道によりますか、黄鳥は丘隅に止る人は仁に止るもの、今は彌陀大願の業力に依らねばならぬ。彌陀の勅命は大慈悲のゆへに、慈悲は邊りなし涯なし際なし、徹鑑力を以

て御見拔なされて、一切衆生悉く其儘來れ助けるぞ救ふぞと、喚で下さる勅命に信順する一つで、いよ〳〵往生の決着は今此座で定るぞと聞せて貰ふた上からは、御恩の程を思ひやり。

第二十一席

外儀のすがたはひとことに止。偖て昨日より辯ト掛けた儀外のすがたと云ふに付て、男子女人をゑらばぬとの蓮如様の御教化ぢやが、此に一つの不審が有る、女人の身は別して佛法の嫌ひもの三密の月輪あまねくてらすと雖も、女人非器のやみをばてらさず、五瓶の智水ひとしくながると雖も、女人垢穢のすがたにはそゝがず、これらの所にをいてなをさはりあり、いかに況や出過三界道の淨土にをいてをや、わづか日本の間さへ昔は、高野三井寺叡山や醍醐、笠置の寺や東大寺など、女人の行かれぬ靈場が四十八ケ所有りました、在

家はゐらばす其中女人ばかりは誡め玉ふ、彌陀の本願ばかりこそ女人の姿をゐらばぬはいかゞぞと云ふに、されば維新已來勅封を解かせられてより、今日は高野嶽山へも女が無事で登れるは、行けよ登れの勅命一つ、今彌陀の本願には四十八願の其中に、三十五の願に變成男子の願が有り、女人の形で置くではなひ、已れの方より男子に仕立てゝ御取りなさるとある勅命ぢや。御文章には「女人の身は十方三世の諸佛にも捨てられたる身なるを、阿彌陀如來なればこそ、我ひとり助けんと云大願を起して阿彌陀佛となり玉へり」と有る、これに依て經には佛心とは大慈悲是なりと說てあれば、佛の心は慈悲で固たものぢやで、慈悲がかけては佛とは云へず、又佛と云名も付けられぬ。然るに女人を得助けぬと云ては慈悲なひ佛かと、御婦人方より不足を云で有ふ、それ諸佛の慈悲は平等なれども、女

人の方から諸佛の慈悲を蒙らぬことが三つある、一には佛法非器、二には女人の自障、三には女人の障他。初に佛法非器とは、女人の心は佛法の入れものでなひ、人間の心の臟は八葉の蓮花で中央に臺が有る、八葉に餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺菩薩の八界と、中央の臺には地獄界と佛界とを顯す、合して十界となる、是を十界の心所具と云。佛家では心蓮花と云ふ、梵語では伽利他心と云ひ、又は赤肉壇と云て赤ひ蓮花の形ぢやと、是の心蓮花が佛のは開敷蓮と云て開て有る、凡夫のは合蓮と云てしぼんで有る、男子の心蓮は合蓮なれども眞直に成て有る、女人の心蓮は合蓮にして而もさかさまに成て有る、已に觀經の曼陀羅の上に逆蓮花を書て有るも、女人の非器相を知らせたものぢや。是れ女人は佛法を受る心の臟の蓮花がさかさまに成て有るゆへ、諸佛の慈悲を色々そゝいでも女人の方から

受付ぬ、たとへば桶や鉢は水を入る器なれども、底を上へ向けて逆にしては、上から水を汲み掛けても内へ水は入らぬ、それゆへ無量劫をへても、諸佛大悲の水は逆蓮花には溜らぬゆへに佛法非器と云ふ。然らば阿彌陀如來の大悲は女人にもたまり、彌陀は女人を救ひ玉ふとはいかゞぞと云ふに、されば彌陀は光明名號の内因外緣の德を以て、女の逆蓮華の中にしゆみこんで下さるゝぢや。たとへば石を水につけをくも中へはしゆみこまぬ、密雲は覆へども頑石はうるほさぬ如くぢや。然るに石を燒き立てゝ石の中まで火になるほど燒た上から水を掛けると、下ゆんと云て石の中まで水がしゆみこむ、今女人の心蓮は諸佛大悲の水に百千萬劫つけて置ても、しゆみこまぬけれども阿彌陀如來無碍光明を以て、宿善と燒き立てゝ到來と中へ通た所で、聞其名號信心歡喜と、名號の水を耳より流し込み玉へ

ばこそ、無緣の大悲識心にしゆみこんで、女人の逆蓮華の中まで大悲の水が入り滿て、往生決定の信を得させて下さるゝ心を「宿善は八重柴垣の梅なれやくゞり〳〵て花は咲けり」「幾度も聞落したる身なれども南無阿彌陀佛の殘る嬉しさ」たとへ因緣要文は聞く下から忘ても、南無阿彌陀佛に助けらるゝ御不思議が心の底にしゆみこんで下さるゆへ、下向の道にも喜ばるゝ、是れ阿彌陀如來は凡夫の拵をかり玉はず、本願の手一つで淨土へ迎んと誓ひ玉ふゆへ、外儀のすがたと云ふは、在家出家男子女人をゑらばざる心なりと御意なされたぞや。

二に女人の自障と云ふは、女人の體に諸佛の大悲を受けられぬ障を以て居る、法華經提婆品には「一者不得作梵天、二者帝釋天、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛心」是を女人の五障と云ふ

先づ女人の身は欲心深くして、己の形ばかりに貪着するから帝釋天にもなれず、洗ても磨ても身にけがれ多く、殊に婬欲有るゆへ梵天王となれず、憍慢自慢が女の常、人に順はず實の敎を疑ひ破るに依て魔王となれず、人をあはれむ心がなひから轉輪王となれず、我を愛して人を愛せず、己が子を思て人の子を思はずゆへに佛となれぬわい。三從と云ふは幼ふしては親に隨ひ、壯年にしては夫に從ひ、老ては子に從ふ、皆つゞまる所は嫉妬の念處より善根を悉く燒くゆへ、五障三從と嫌て諸佛は大悲の御手を垂れ玉へども、女人の方よりよせつけぬから諸佛も手を空くして御座る。薪は火のためにやかるゝものなれども、薪が火に近よらねば火も薪をやくことがならぬ如く、今女人が諸佛に近よらねば諸佛の大悲が得られる因緣がなひ然るに阿彌陀如來は緣うすき女人を、いかゞして救ひ玉ふぞと云ふ

に、阿彌陀如來は衆生のためには大因緣があるゆへ、念々に應ドて衆生の心中へ御入なされて下さるゝ、已に觀經を見れば韋提夫人座敷牢の中に有けるに、釋迦彌陀二尊牢の中へ來らせ玉ひ、無生忍を得られたが、釋迦如來が除苦惱法との玉ふとき、直に阿彌陀如來が我なりと頭上に影向遊ばした、四辯八音の釋迦の說なれば何程手間が入ることが有ふ、それさへ待ちかねて現れ玉ふは、是れ十劫已來待かね玉ふ大悲なるがゆへぢやぞ。今もたとへ五障三從のさはりにて、五欲の牢に有るとても、一念御助け候へと信順無疑の當體、直に行者の心中に影をひそめて影向ぢやわい。たとひ嫉妬の念は焰々とも忍て自力の功德善根はやけるとも、御信心は金剛心なるゆへに女人の嫉妬の念にていさゝかも變せず、却て妄念の煩惱の中から色を增して大悲を喜ぶぞ、然れば御信心の方は取分て本願の尊さを仰

き、如來の御恩の深きほどを、思ひ浮べて御恩の稱名。

第二十二席

偖て前席に女人は諸佛の御慈悲にもれると云ふに、三義を御話に及びかけた、第二番までは辯じましたが、三に女人の障他と云ふは、女人の身には自ら佛法の障りたる姿を現して、却て人の佛法に入る障をなすが女人の身の上ぢやはどに、佛も一度女人を見れば眼の德を失ふと有る。昔より佛法初入の人達の心を亂し、修行を怠らすは多くは女人ぢやぞ、彼の毛虫と云ふものが惡いもので、若し是の毛虫にさはるときは直に人をさいて甚だいためて難義をさせる、そして己が毛を拔て甚だ痛で難義するものぢやが、今女人が自損々他することは毛虫と同ドことで、自分も佛にならず人をも妨て佛法へ入れず唯人をたぶらかす、依て他宗などでは同坐戒と云て、女人の同席

を許さず、四十八ケの結戒も女人が修行を妨げることを恐るゝのぢやぞ。佛もたとひ大蛇を見るとも女人を見るべからず、又外面は菩薩に似て心は夜叉のごとしと戒められた、然るに阿彌陀如來は御回向の御信心に金剛の德をそなへて有るゆへに、御祖師が妻帶の宗旨を開て自ら女人に交りて御信心ばかりは女人にもさへられぬぞと御意なされた、是れ全く彌陀如來は、第十八願に十方衆生と有るからは、女人も其中にこもりてあれど、別して罪深きゆへに重て三十五願に變成男子の願を立てゝ、女人を男子と轉ドて受取ふと云ふ御誓なるゆへに、女人までが肩をひろげて極樂參りが出來るぞや。併し此に不審が有る、女人を男子に轉ずるが彼の土の益か、又は此土の益かと云ふに、されば法體は彼土の益で、是の世に有る間は五障三從の女人で一息斷絶のとき、無上涅槃の御證に至らせて下さるぞや。

又安心門で伺へば此土の益、一念歸命の時無量劫に佛性を得ざる女人に、信心を得させ下されたが變成男子の御利益ぢや。依て涅槃經には「知二佛性一曰二男子一不レ知二佛性一曰二女人一」と說せられ、大信心は佛性なり佛性卽ち如來なりと仰せられたれば、信心を得たものはたとへ形は女人なりとも、佛は男子と見玉ふぞよ、信心を得ぬものはたとひ形は男子でも佛は女人ぢやと思召す。されば女人ぢやとて肩身すぼめることはなひ大手をひろげ喜ぶがよい、又男子でも大な顏はならぬぞや。加樣に申せば女同行はいさみ立て喜ぶが、男衆はをれらは有難くなひと思いしやるが、夫れは惡ひ了簡ぢやぞ、女が往生が成ると聞かば男衆は猶喜ばねばならぬ。なぜなれば大切なものは親に過ぎたるものはなひ、可愛至極は妻や子ぢや、厚恩受けた母も女、可愛ひ妻も女にて、不便と思ふ娘も女、若し女人が往生ならぬとあれば、我は男で往生をとげても、母や妻子は此世限りの結緣かと思はゞ、跡へこゝろがひかされて極樂へ參るのに勇みが有るか、ひのに、女人も往生なるときは親子夫婦も一蓮託生ぞと思ひなば、愛別離苦も苦にならず、却て御恩喜ぶ御緣となるぞへ。

あの平家物語を見れば、法性寺の俊寬と、丹波少將經成と、平判官康賴は、鬼界ケ島へ流されたとき、康賴經成の二人は勅免を蒙り歸國されたが、其時「二羽は立つ一羽は島に寒苦鳥」と、二人は都に歸りたけれど俊寬一人島に止り、悲さは云ふに及ばず殘して歸る二人の者も、共に三人むつまじく共につらさを語り合ふさへつらさ是の島なるに、只一人跡に殘して歸るとはと、嬉さを忘れて足づりをして泣かれたと有る。今日の我等も母や妻子を生死のはなれ島に殘して、男ばかり極樂の都に歸るとも何の樂が有る、そこを哀み玉ひ

て阿彌陀如來の本願の弘誓の迎ひ舟は、男女老少をゑらばず夫婦親子もろともに、弘誓の舟にひさならべ、同ト淨土の都入「我や先人や先きかも白露の消て又逢ふ法の友人」何から何まで御氣の付た、何に不足なき起世無上の御本願ぢやぞ。御和讃に「如來の作願を尋ぬれば、苦惱の有情をすてずして、回向を主とし玉ひて、大悲心をば成就せり」其回向とは回施趣向〳〵とは佛の方よりふりむける、其ふりむけるとはどんな鹽梅、彌陀の回向成就して、往相還相二つなり、これらの回向によりてこそ、心行ともにゑしむなり、此中往相とは往生淨土の相を云ふ、還相とは還來穢國度人天、娑婆へ還りて衆生濟度、此還相の有樣を曇鸞大師の論註には、彼の佛國に生する菩薩に四種の德をそなへ有ることを說けり、一には不動偏至の德二には一念偏至の德、三には無前無後の德、四には示法如佛の德。

初に不動偏至の德とは、菩薩衆生を度せんため、機に應じて身を現すること一に非ずして、或は菩薩身を現し或は佛身、或は童男童女、近く申せばあの法華普門品の觀音の三十三身を現するが如く、日輪天をはなれずして世界中を照すが如く、菩薩の應化身六道に遍すること、其元の體動かさずして、初地菩薩は百佛世界に於て、一念一時には相成道の化儀を現はし、二地菩薩は一千佛、三地菩薩は一萬佛、四地菩薩は十萬佛、五地菩薩は百萬佛、六地菩薩は千萬佛、七地菩薩は、一億萬佛、八地已上は十方無碍、各我等も御淨土で十方無碍に衆生濟度、嬉ひことではなひかのう。二に一念偏至の德とは、一念一時極ちゞまりた時間の內に身を十方に現すこと。三に無前無後の德とは、十方世界に身を現すること、さらに前後なくして諸佛を供養することが出來る。四には示法如佛の德とは、西方淨土の菩

薩慈悲勇猛堅固の志願を以て、清淨の土を捨てゝ佛法僧のなき所に至りて、自由に濟度して佛在すが如く、法を所々に示して斷へぬ樣になす功德ぢや。近く申せば聖德太子我朝に出世遊ばし、又善無畏三藏は日本に渡れども法を聞く機なきゆへに、持たる大日經を大和の久米寺の堂の柱に納て歸り玉ひた。併し此時利益はなかつたと雖も、弘法大師久米寺に至り、柱の穴より大日經を取出して、是を讀めども更に解すること不能して、唐に往て惠果阿闍梨にあふて密法を授り、日本へ歸りて密敎の祖となる。又達磨大師太子の時節に來り玉へども、禪法を傳ふべき機なきがためむなしく歸り玉ふ、されど後に又傳はつて有ります。今は淨土の大菩薩無佛世界に至ると云て、釋尊の出現し玉ふ如く、八相成道を現ず、或は三十三身を現し或は無上身を現はして、衆生を利益することが、全く彌陀の本願の

なしわざにて、今各や我々が西方淨土に往生すれば、同ト六字の働なら十方世界佛の在す所も在さぬ所も差別なく、自由自在の還相回向、やれ樂もしやの御本願打仰ては。

第二十三席

外儀のすがたはひとことに止。偖て御取次に及ぶ述懷讃。一昨日の御座より二首目の讃、外儀のすがたはひとことにと云ふは、早辯ト まましたが、今日より賢善精進現せしむ、貪瞋邪僞多きゆへ、奸詐ゝはし身にみてりと有る、この三句を御聽聞に及ぶ、先づ賢善精進現せしむと云ふは、賢はかしこぶる善はよい貌すること、精進とはあつぱれな人と見せること、現はかざりて見せる、せしむとは文字に直すと令の字で、使ひ回し引きまはして見せると云こと、御和讃の中本願弘誓に歸せしむるなどゝあるも、本願力より使ひ回しひき

まはして歸せしむると云こと、今現せしむと云は、今日の我等が内心の容體から見れば、中々外に賢善精進を作る身ではなけれども、名利の二つが引まはしてかしこがらし、よい貌したりあッはれな人ぢやとさせるのぢやと云ことを、賢善精進現せしむと仰せられた。あの甲斐の信玄と云ふ人は、一生の間論語を手に取あげて讀さなんたは、伯父を殺したことが有るゆへ、差支て見ることが出來なかッた、不孝な者には孝の話は都合が惡ひ、今我等も心から見れば耻ふて、賢善精進の貌がまへのなるものではなけれども、五濁惡世にすみなれてさしつかへることも思はず、面の厚い名利の二つにひきさはされて、賢善精進の貌あッはれ者でさると表には現ずれども、さながらつゞれの上に錦を着たやうで、上向き美じけれどもをりをりは下からぼろが出るやうに、上べには賢善精進かざれども、下から貪瞋邪僞がそろ〳〵と出掛て、することなすことにつけ出て來るわい。貪瞋邪僞多きゆへとは、貪は貪欲瞋は瞋恚邪は正を破ることで、唯すなはなることを嫌ふ、僞はいつはりと云て作りでと拵へでと〻云こゝろぢや。荀子には「仁義無僞」と有て、婆さん先日嫁と嚙合ひわん〳〵云て御座ッたが、全體どうなされたのぢやと云へは、あれはノウ嫁が一寸も寺參りせずそれのみか佛前を粗末にするそれが目にかゝるとヒヨッと煩惱が起てノウ、いやもう先日の御教化には源信和尚は「妄念は本來凡夫の地體なれば、妄念の外にはこゝろはなきなり、臨終の時まで一向妄念の凡夫にてありと思て念佛すべし」と仰るで、と何のこれは婆さん聞き違ひぢや、これは深信について己が心中をつくろふて、深くならふ丈夫にならふと思ふこゝろをやめにせよとの御教化、それに内へかへりて嫁と喧嘩をした

のを善きやうに作たのぢや。又友同行に死ともないと思ふは誤り、死は淨土の快樂を喜ぶのぢやと話をして居りしが、右の婆さん病氣となり藥を飲て養生するによッて、友同行の云はるゝには死で極樂へ參ることを喜ぶ御前が、養生せずと急で淨土へ參らしやれと云へは、いや死ともないではなけれども長生して、私は早や信を得た身の上ぢやで、友同行を數々拵て、手に手を引て參るつもりぢやと云はれたとある。是皆惡を善で包であるに依て、僞の字をいつぱりともつくりものとも云ひますぞ。

次に奸詐もゝはしとは、奸は私なり姪なりとありて、たましてこますを云、神子などが殊勝な貌して身をつくり、神が乘り移てでざると云て人をたまして呑こまし、或はやくたいもなひものを結び拵へて、是は弘法大師の御作などゝ云て呑込ねばならぬやうに拵へてたます、そのたます鹽梅は上手ぢやぞ。有る所に我は弘法大師を念ずるゆへに、拜めば病も治し又不正直なものは直に正直とするのだと云てありしが、何時となく人々迷を起し、己が茶屋ぐるひで遂に鼻が落て有る、是をどうぞ治して下されと願をこめ、己が盜みてやッてこれをどうぞ逃して下されなどゝ、大勢集り幟を千本も立る有樣でアッたが。或日暮に六人連にてやッて來て、其中で主と見ゆるものが云ふには、先日私は家の机の上に五圓札一枚置さましがが遂に紛失を致して、此六人の中に盜んだ者が有ふと私は思ふゆへ、どうぞ拜で下されと云へば、よし〳〵それは大師に賴めば直に出來るぞと、それから燈明をそなへ何か經を讀み終り、六のちよくを出し瓶の中より水をくみて、一々それに入れこれは水初穗にて、此水を呑めば盜みしものは口がいがみ、手足は立ぬものぢやと云て一つ

づゝ前に置き、私がらんぷの火を消せば直に大師が現れるゆへ、其時輪を三つ打つから、それと同時に呑がよひと云ひおくや否や火を打消し、六人の前にすへをきたは眞闇がりなれど、凡そこゝらがナヨクの有るところと知り有るゆへ、靜に其六人が知らぬやう、其ちよくの中へ一々墨を入れ、それより輪を打てば六人のものちよくをさぐり手に取りたれど、五人の者は盗まぬゆへ何も恐れず其水を呑めども、一人の者は呑めば口がいがむと聞しゆへ、闇がりのことゆへ、ぢッと疊の間にうつして呑まずに呑んだ貌、各悉く呑み終りしやと云へばへい〳〵と答ふゆへ、直に元のらんぷに火をつけると、五人の口元は墨が付て有れど、一人は呑まぬゆへ墨が付てなひ、それを見るより五人は早く歸らしやれ、此一人は殘られよと五人は家に歸りしが、一人跡にのこれり。そこで云ふにはさあ貴樣が盗みし

に相違なひと、我に大師の御告ゆへつゝまず早く申すべし、大師がもう一時間ばかりすれば御出現ぢやと云へば、此者つゝまず盗みしよしを語れりと、是れも善き樣なれども人をたぶすが上手、是を好んと云ひますぞや。詐はいつぱり俗にうそつくと云文字ぢや。偽はとうまはしにいつはること、詐はさしつけていつはることぢや。ぱしとは百端と書て、百は物の滿數でかずの知れぬことぢやが、何につけ角につけちら〳〵見ゆると云ふ氣味で、端ははしはしへ顯れること、身にみてりと云ふはみち〳〵てあると云ふことにて、略して身にみてりと御意なされた。然れば機の方より詠めて見れば淺間敷や、惡でかためた身の上ぢやが、法の方から見るなれば、五濁惡世の有情の撰擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみてりと、願力を信ずれば功德が行者の身に滿て下さるゝ

ゆへに、内より如來御回向の御力が働て珠數をかけねばならぬ樣、法義の御座へも引回し口にも稱名となへねばならぬ樣つかひ回して下さるゝ、何も知らぬ愚者で御座ると思へども、萬德圓滿の光がちら〳〵と顯れて、世間の横さま話が聞たうもなく、法義の物語りと云へば耳そばだて聞く機になる、凡情の有樣でほしひと思ふ中からも、あゝ早や捨てゝ行く物をと貪り欲も機が付くやう、たとひ病にあふとても本願すれば君のため法のために力を盡し、死ては安養淨土ぞと一人喜び、昔は惡事で人をたましたに、今はたましてなりとも善き法義善き道が呑こませたひと、我心の底に喜のみつるゆへ、付合ふ程の人々へをのづと願力の御慈悲を云聞せて、世間話の端がいつのまにやら稱名の御緣となり、我も喜び人も喜ばせ、かゝる身の上に成り得たはみな願力を御手柄よと、外儀のすがたをかざりたがる心中へ、如來の方より無漏眞實の信心が入り滿て下された、嬉しさよと思ひ出ては御恩の程を喜ばれやうぞ。

第二十四席

偖て各々當席では威儀作法を正すに、自力の人と他力の行者との心得を申します、自力の法門では心一杯威儀を正さねばならぬ、一寸佛を拜むのでも天台に於ては、四種の三昧常行と云ふて、三昧常三昧、半行半座三昧、非行非座三昧、西域記やら瑯琊代醉などに、三拜九拜五百拜などの威儀があり、手を合すにも合蓮花の拜みやう、末敷蓮花の拜みやう、開敷蓮花の拜みやうなどの作法が有て六ケ敷弘願眞宗の敎ばかりは禮拜の作法も敎へ玉はず、外儀をつくろはず有の儘で本願にすがれば威儀作法によらず、只他力の信心たに決定すれば、恭敬修の利益より自然と禮拜恭敬をなし、信心を佛智より

起さしめ玉へばこそ、忘れとうても忘れられぬ無間修の顯れて、行住坐臥もゑらばず時處諸縁もさはりなく、ねても起ても立ても居ても、時をも云はず所をも嫌はず南無阿彌陀佛〳〵と思ひの儘の仕合ぢやぞ。時に此和讃は内心に貪瞋邪僞をいたいて、外儀を殊勝につくろふことを悲み玉ふのぢや。されば外儀をつくろふはよくないかと云ふに、同行中能く心得ねばならぬことがある、外儀をつくろふにも二色が有て、一には自力散善の人、是の人達の心を考ふるに念佛をとなふるにも、惡をとゞめて有難い心に成り、そみ〳〵と念佛をとなへて斯もをてこそ往生すべしと思ふ心が有る、是れ外儀を以て心のたのみにする自力のはからひなれば、是は當流ではきびしく御誡めぢや。丁度傾城の身をかざる如く、黑き顏へ白粉をぬり紅をさし色々に作り立てゝ、是なれば誰れの氣にも入るべきやうにとつ

くろへるはいとゞ淺はかに見ゆるぞや、況や阿彌陀如來は内に貪瞋邪僞をいたく見苦き心を持乍ら、賢善精進の紅白粉をぬりたてゝもいかでか是を喜び玉はんぞ、却て其つくろひ心をば嫌ひ玉ふほどに有の儘で本願にすがれと敎へ玉ふが當流の安心。若し他人の所へ行くのならば亂れ髮では行けぬ、隨分威儀を正さねばならぬ、親の所へは髮のそゝけも其儘で破れ着物で行たとて氣にはせぬ、今も十九二十の雜行雜修の自力人は、阿彌陀如來とはいつも他人向きゆへに妄念煩惱の亂れ髮を直し、定散二善の威儀を正せども、他力の行者は若不生者の血筋を引いた、親子の因縁深ければ妄念煩惱の髮のそゝけも其まゝで、かゝるものをとすがるが否や大悲は大に喜び玉ひ大光明に攝取して西方淨土へをくり屆て下さるゝが、他力の行者の身の上ぢやぞ。二には信後の人、是れは第十八願南無阿彌陀佛の御

六字を聞信一念で得た人は、常に光明の中に住む身ぢやで行住坐臥も大悲の彌陀をはなれぬ、爰を白樂天は「立てば彌陀居れば阿彌陀阿彌陀佛我をはなれず我亦阿彌陀佛をはなれず」と云はれた、朝な朝な報佛と共にをき夕な〳〵報佛と共に臥す、起居動靜共に大悲をはなれぬと思へば、自ら常に御冥見を恐て身をたしなみ心をたしなみ立居起居にも慚愧の思を生ず、信の上からは坊主なれば佛前へ出でるも衣袈裟をはなさぬやう、在家なれば肩衣をかけ手に珠數を持ち隨分威儀も改め恭敬尊重し、他宗他門の人に指さしに値ぬやう相嗜まるゝは信後の嗜みと云ふものぢやぞや。かく申せばとて威儀作法を正すを以て往生のたよりにするは自力と御嫌ひ、信後の嗜み報謝の經營、必ず物事一該に心得ねやう美ふ法義を相續しましやうぞ。さあ各不可稱不可說不可思議の大な利益を頂たら忘れられぬではな

いが、小言云ふ間があれば佛恩を喜べ、二返三返呼立てゝ嫁が返辭をせなんたら目を四角にむきたてゝ腹を立る、此婆々を十刧已來呼せて置て、ほんに今まで知らずしてうか〳〵暮す此奴を、助け玉ふ御本願ぞと誤りはてゝ喜ばれよ。已が信心頂たら人をすゝめて常行大悲、御一代聞書には「信もなくて人に信をとれよ〳〵と申すは、わが物をもたずして人に物をとらすべきと云心なり、人承引あるべからず」と仰られたが、至極最もぢや。當年二月の頃拙僧が大川郡津田町大字北山と云へる濱邊へ說教に行きしが、一人の婦人が參詣して拙僧に向ひ申すには、何卒今日の午後には私宅へ御招待申度存ドますが如何で御座りますかと云はれるゆへ、承知致して參り御法義を取次致せしに、此婦人の申すには私が生れは津田町字須賀と申所で、これより凡そ一里半南で御座りますけれども、唯今は此家

に縁付きてより、日々佛法聽聞させて頂き仕合せの中の仕合、乍去我生れ里の兩親、未來は大事の中の一大事なるに、ねから佛法聽聞せぬ樣子、それをほんに思へば一蓮託生の御淨土とは云ながら、信を得ずして分れ〳〵になるときは殘念でたまりませぬ。其れを案ト て夜の目も樂に合はされぬ、何卒明日御歸村の時にても立寄て、兩親の領解を質して御聽せ下され私も同道致します、何卒〳〵と涙ながら拙僧に向て物語ゆへ、さらば云はるゝ通り立寄らんと申せば大に喜び、愈翌日に同道致して行し所、右の婦人兩親に向ひ人間は今にも知れぬ壽命ぢやが、未來は云何で御座る、今日は知識を招待して參りたしたゆへ、何卒間違のなひやう御領解の身となりて、未來淨土まで親子共往生をとげさせて頂きたふ存ずますと、それより家内打揃ひ喜ばれたが、さあ各如何で有ふ「つゝめどもかくれぬもの

は夏虫の身よりあらはれる思ひなりけり」誠の信心頂たら還相回向の働きは未來ばかりか此世にて、ちらり〳〵と現れる程に、信心決定の身の上は存命一期は隨分身をたしなみ、法義を美しく相續有て只何の中からも報謝の稱名。

第一一十五席

惡性さらにやめがたし　こゝろは蛇蝎のごとくなり
修善も雜毒なるゆへに　虛假の行とぞなづけたる

偖て今日より第三首目にかゝりて辯ずます、即ち此一首は惡性やめがたくして、たま〳〵善根を修しても雜毒の善にして、成佛の因にはならぬことを悲歎なされた讃文ぢや。先づ初に惡性と云ふは、六要抄の意によれば、惡性とは三毒のことにて、惡とは敎を用ひざるこゝろ、道を破り氣儘にすると云こゝろで敎と云、文字はさしすせ

その通音でおさへると云ふことで、我儘の心をおさへると思ふやうに働れぬを、其おさへを無理に破るを惡と云ひます、性とは積聚の性と不改の性と二つ有て、先づ積聚の性と云ふは、はしりさきの溝などは常に不淨を流すゆへに不淨となる、若し常に清淨なものばかりを流さば清淨な溝となる。今我等凡夫も常に善根功德の清淨の菩提心を流さば善性となれども、常に妄念煩惱の泥に三毒のきたない不淨を流すゆへに、積り〳〵て惡性となるぞ、しかし是は聖道門で沙汰する性のことで、儒道神道も是の心ぢや。孟子にも性は善なりと云ふ、是は本性はよけれども人欲の私に覆はれて惡性となると立る、今淨土門御祖師の御意では、末代の我等如きの惡人は不改の性と云て、はへぬきのわるものと云ふことにて、たとひ善をなせども其善が却て惡と變ずる、たとへば大海へは川々の水が流れこめども

海の德で水が變ずてうしほとなる、井出の玉川や養老の瀧など云ふ名水でも、海に入るや否や一味の潮となる、是が海の不改の性と云もの。近く云はゞ人間の腹の中のやうなもので、美味清淨の食物をすると、ぐう〳〵と咽の穴をこゆるかこゑぬにたちまち不淨と成るもとの清淨の姿は失ふて仕舞ふ、是が不改の性ぢや。今も心に約すれはたま〳〵善根功德をなしても、妄念煩惱の不淨となる、又學問を積れども名聞となり、說敎すれども利養となる、經藏へ入て一切經をたとひくるとも、人の知らぬことを見出し智者と讃められんことをのぞみ、所々に開張しても結緣とは雖も信施を貪り、己が心で惡道の苦を招く、是れ三毒煩惱の不改性ゆへに、善ひ事しても惡と變ずる是を惡性と云ひますぞ。さらにやめがたしとは、さらと云ふ文字は萬葉集に三字有り、皿と云ふ字と更の字眞改とも書く、初の

皿と云字は淺ひと云氣味に訓するゆへ、さら〳〵とすんだと云こと
につかふ文字ぢや。其次の更の字はさうなうてさへと云こゝろ「さ
なきだに重きがうへの小夜衣我つまならぬつまな重ねぞ」と讀たる
も、さうなふてさへと云ふこゝろトや。又杜甫が詩に「伐木丁々
山更幽」と云ふ木を切る音の聞ゆるはさうなふてさへさびしいにと
云ふこゝろ。三に眞改と書くはどうしてもと云ふ心、打返し〳〵吟
味してもと云ことにつかふさらぢや。今の讃のさらは三番目の眞改
のさらにて、どうしてもと云こゝろである。やめがたしとはやめる
にも數々有て止の字は思ひとまると云こゝろ、留の字は行くをとゞ
まると云ふこゝろ、侵の字もやめると訓して字典に、侵は朘削なり
と註して朘は說文に小兒の陰なりと有る、和訓にしゞまると云龜の
頭をひッこめた如くなるを云、削はけづると和訓してほそくうすく

すること、今のやめがたしとは不朘不削なり、日々の御勸化に細く
も薄くもならぬをやめがたしと仰せられた。「檐滴非錐能穿石繩
非斧終絶車」と有て、雨垂れのしづくで石がくぼみ、あさいと
はやはらかなれども終に車がきれる、然るに面々の身の上は日夜の
御勸化に、妄念罪業が少しの間もやまらざるは不改の性なり、故に
惡性さらにやめがたし、どうしてもちゞみもへりもせぬと仰せられ
惡性さらにやみもちゞみもせぬからは、三毒煩惱の根をたち成佛な
どゝは思ひもよらず、それゆへ御祖師が是を悲歎なされた。彌陀の
本願がなくばなげくばかりで有るものを、今彌陀の本願は男女善惡
の凡夫を働かさね本形にて、本願の不思議を以て生るべからざるも
のを生れさせ玉ひたればこそ、超世の本願とも横超の直道ともきこ
へ侍んべれと御意なされたぞや。横超とはよこさまで筋道のたゝぬ

をよこと云ふ、車は横に推されぬ如なれども、車も舟に載すれば横にをすことが出來るぞや。大經には横に五惡趣を截り惡趣自然に閉づと說き玉ひ、正信偈で頂けば卽横超截五惡趣と說せられ、銘文には横はよこさまと云ふ、よこさまと云ふは如來の願力を信ずるゆへ行者のはからひにあらず、五惡趣を自然にたちすて、四生をはなるゝを他力とまうすなり、是を横超といふなりと、又横超と云ふは横は如來の願力他力をまうすなり、超は生死の大海をやすくこゆて、無上涅槃のみやこにいるなりと仰せられた。そこで此横超は竪超に對した言で、横超とはよこにこへること、竪超とはたてにこゆることちや、十信十住十行十回向十地等覺妙覺の五十二段をこへるには初め四十段をこへるにさへ、一大阿僧祇劫を經て、有相の六婆羅蜜を修して、婆婆出現の佛にも七萬五千佛の出世に値て供養をなし、油

斷なく修行して、やうく苦集滅度の四諦を證り、四十一段から四十七段までは破相の六婆羅蜜を修し七萬六千佛を供養して、をまけに七地沈空の難を越へ、四十八段から五十段までは無相の六波羅蜜を修し七萬七千佛を供養す、此間は全く利他の行にして我身を捨てゝ衆生濟度、それより百大劫の間自利の行をつとめ相好圓滿して佛になる、是を堅超と云ひますぞや。たとへは五十二節の竹を一疋の虫が、一つゞゝこへて上へ出て明を見んとする如く中々六ケ敷、然るに横に食ぬくときはたつた一つの皮さへ出でたら直に明りは見ゆるけれども、少さひ虫の力なら皮一重も中々食ぬけられぬ、それを一人の者が有て錐で穴を明て少し明を見せてくれたら、其光を見付て何の造作もなく外へ出るぞ有ふ。今五十二段をこゆるは五十二有る竹の節をたてにこゆる如く、三僧祇百大劫の長の年數なら、虫同前

の凡夫はとても及ばぬぞ、然るに彌陀の本願をたのみ他力の御働で迷の皮一重をこへさせて下さるから、無上涅槃の證りの光は見ゆる依て凡夫の力で食ぬくに非ず、今日の我人は六道生死の迷の節にとゞこめられ、闇から闇へ迷て居るを善知識の御教化の錐で、宿善開發と開かせ下さるなり、御六字の光を見つけて一念歸命とすがるや否や、五十二段も一足飛是を横超と云ひますぞ。有る山家の親父が隣家へ行て咄をして居る内に、梅干の壺を見るよりしきりに梅干が食たうなッた、そこで御氣の毒ながらあの梅干を一つ下されと云たれば、夫れこそいとやすいことソレ取られよと壺をさし出したれば其儘手を入れたが遂に手がぬけぬ、さてこれは氣の毒なこと家内のものも笑止がッて有りしが、亭主が金槌を以て打破したれば、道理こそ梅干をぎッしりと手に一杯握ッて居たと。各我等は三毒の握り

こぶしを開かぬゆへに生死を出ることがならぬが、阿彌陀如來なればこそ三毒の煩惱を握りながら、光明の金槌を以て一念歸命の端的に、無明の闇を打破て下さるゝがゆへに、疑深ひ此奴が疑はれて煩惱妄念の中からも、やれ〳〵嬉しや南無阿彌陀佛。

第二十六席

さて各や我々は惡性三毒煩惱は、過劫久遠の昔よりしゆみこんで有るゆへ、煩惱を斷せんとすれども暫くも止るひまがない、然るに當流には不斷煩惱得涅槃と有て、八萬四千の煩惱かゝへた泥凡夫もそのまゝで、西方淨土に往生さすぞと御教化ぢやぞや。昔日野の大納言殿は奈良の元興寺の堂に登りて、諸方を打詠めて下をさしのぞき玉ふに、あまり高さに恐く思召し欄干を握りてがた〳〵ぶるひで有りしゆへ、人々が是れあぶなひと後から抱てサア御手をはなし御下

り遊ばせと云へば、ぞッこん恐いと思ひてんで御座るゆへ欄干をはなさぬ、さて迷惑ぢやと、住僧が申すには欄干を握て御座れよと、鋸を取り出し欄干を引切て握りながらをろしたれば、今まではなさなんだ欄干を忽ちはなしたとある。今日の我等も握りつめた貪瞋煩悩ゆへ、我等が方にはなさぬものを如來の方に能く知り玉ひて、一念卽滅無量罪と佛の方で三毒煩悩の根元を切て淨土へ迎て下さるゝ淨土に至るや否や是までではなさなんだ三毒煩悩の欄干も忽ちはなして、無漏清淨の煩悩の垢のぬけた無上涅槃の御證りぢやぞ。ゆへにそのやまらぬ煩悩をやめよふ〳〵としては本願は信ぜられぬ、其三毒煩悩を相手にすな、只かゝるものを本願の不思議を以て御助け下さるぞと本願にうちまかせば、無始已來つくりとつくる惡業煩悩をのこるところもなく願力の不思議を以て消滅するいはれあるがゆへに、正定聚不退の位に住すとなりと仰る、是を御和讃に「彌陀の智願海水に他力の信水いりぬれば、眞實報土のならひにて煩悩菩提一味なり」と直に煩悩なし佛けとなる、必ず三毒煩悩に目をかけぬがよい、此體は煩悩の入物ぢやゆへ、是の體の有る間は煩悩はやまらぬ、然れども淨土に入ると土地の德で煩悩はさッぱりなくなるぞ。あの印度の崐崙山へ石瓦をなげこんでをけば終に黃金となり、江南の橘江北へ宿移りさせば枳となり、我日本でも加茂のヒイラギ神社の垣の中へは、何の木を植てもヒイラギとなる、是みな土地の德ぢや。同行衆の合點のゆくやうに喩を以て申せば、去る所に極蕩の大博奕打が有りしが、初の頃は一文へぎの寶引から次第々々に大博奕終には身代に疵をつけ親兄弟親類緣者朋友から異見をすれども聞入れず、日々博奕を打かけ夜ぞりいつゞけするやうになり、もうか

うなると親父も堪忍袋のひもきれて、貴様がやうなやつはとても是の家相續は出來ぬゆへ、勝手次第に出て行けと勘當され、もう親類朋友も相手にならず、據なく丸で乞食のさまとなり、彼方でぶらり此方でぶらり一文二文づゝもらふて、其もらひだめが出來ると早や橋の下で乞食仲間と博奕をやりかける、是れ乞食になりても博奕がやまぬ、己が乞食の身となりたも博奕ゆへぢや、それなれば自身も博奕はよいものと思て居るかと云へば、これはよく〳〵惡ひものおれも博奕打たずは是ざまになるまいものと、自身も博奕は惡ひと合點しながらこれがしゆみこんでやまらぬ。所が此地より東京へ行て役をつとめた財産家が有て而も跡取がなひ、それゆへ其博奕打を跡取にしたひとて使をたてゝも誠にせぬ、それより五度も六度も使が來れば、己がやうな博奕打どうしてあの御役人の内の跡取がならふ

と中々呑込まぬ。所が東京よりわざ〳〵主人が來て、其方は見所が有るぞう有ても東京へ連ていなねばならぬと無理に引立、蒸汽や汽車に引乘せて、とう〳〵東京へ歸り跡取にせしが、何を云ても役義を務める内のことゆへ、逢ふ者はみな暦々で博奕仲間は一人もない又是まで親類朋友が異見してもやまぬ博奕が、此屋敷へ入込むなり誰が異見のしてもなけれども博奕の相手がなく、役人達の暦々と物語する内にいつとなくやみたとある。今も其如く我等が煩惱の博奕も、元來は今のやうな煩惱具足の凡夫ではなかッたに、忽念々起明爲無明と煩惱の起り立は聊でありたれども、三細六麤と次第々々に煩惱が增長し、日夜につのりては八萬四千とおびたゞしくなり來るゆへ、十方の諸佛菩薩が色々と御異見なし下されども、どうしても聞入れぬゆへ、十方諸佛にも必墮無間永不成佛と勘當せられ、今は

三界流涙の乞食凡夫となり下りて三悪道の橋の下、此人間の住居となりてチカラ煩悩がやまぬ、悪性さらにやめがたし今この様な白地底下の凡夫となッたも煩悩ゆへなれども、煩悩がやめられず欲の深きも悪いこと、腹の立つのも悪道の業因と合點しながら、差す手引く手に煩悩が起るは、久遠劫来魂に染み付て有る。然るに西方の教主本師法王の阿彌陀如來は、煩悩具足の我々を極樂淨土の取跡りに仕度とて、先づ天竺へは龍樹菩薩天親菩薩と二度まで御使を御立なされたれども、我々が疑てかゝる徒者は參られまひと受付ぬゆへ、唐土へは曇鸞道綽善導吾日本へは源信源空と重々御使を立てども驚ぬゆへ、やむことを得ずして十方諸佛の王たる阿彌陀如來が、直々に此土へ祖師聖人と顯れて、煩悩惡業のつゞれ袖を引立てゝ、十八願の大乘物へ引乘て、極樂の法身報土の御屋敷へ連とんで下された

れは、諸上善人俱會一處見るも聞くも歴々はかり、大上菩根界の土地なれは、煩悩惡業を作る仲間もなければ煩悩の垢のぬけた無上涅槃の御證に至るのぢや。依て御當流では不斷煩悩得涅槃と、斷てやまぬ煩悩に目をかけず、かゝるものを御助けの御本願よとすがれは、如來のはからひとして淨土往生させて下さるゝ、淨土に入るや否や三十二相八十隨形好、彌陀同體の御證そとの御教化なれは、廣大深重の大悲を重ト、御恩の程を喜びあげては報謝の稱名。

第二十七席

惡性さらにやめがたし止。偖て前來御取次に及びかゝる三首目の中の初の一句、惡性さらにやめがたしと云ふはあらく辯ト申したが第二の句に心は蛇蝎の如くなりと、各や我等が心は實に瞋恚が盛にして、よりつくこともならね恐いことぢやと、蛇蝎に御たとへなさ

れた、蛇はくちなはと訓してのんびりとせずたゞわたかまりたるものゝ、是は凡夫の四轉倒に迷て居る有様、何でも直に行かず横道を好み、瞋恚の心に依て横に見なし聞なし、其身が人にふれて害をなし毒をのこすことを蛇蝎の如しと喩へ玉ふ、法華經の譬喩品に「理を執して瞋恚するを惡龍と云ひ、非理を執して瞋恚するを毒蛇と云ふ」と說せられて有る。又蛇蝎は本草四十卷卵生蟲の部に「人を螫せば必ず死す」と有り、蝎は和訓にはさそりと云ふ又たくは虫とも云ひます、然れば今日の我等が心は毒蛇惡龍の如くにして、瞋恚の毒を以て人を損害し、我も佛性の惠命を斷ずるがゆへに、油斷のならぬが人間の心ぢやぞや。蛇の毒は熊の膽が能く消し、蝎の毒は蟬のからがよく消すとやら云ふが、阿彌陀如來は五刼兆載永刼の御苦勞有て、本願の名號たる南無阿彌陀佛の妙藥を御成就有て、令諸衆

生功德成就と、我等衆生へ御廻向なされて下さるゆへ、一念無疑に如來の本願を聞信する一つ、其聞信とは聞其名號信心歡喜、此聞と信とは通途では別なれども、今は聞卽信で別でなひ。此の聞に就て聞き開き聞き得る聞き定る聞き持つなど色々の義がありますが、聞卽信と云ふときは聞て信ずること、信の字は人篇に言と云ふ文字を書て、人の言を聞て疑はぬこと。然るに聞わけて信心のなひを聞信不具と云ふ、是を蓮如樣は聞分たる人はあれども聞得る人は甚だ稀なりと御誡め。此聞き分るとは分りたこと、聞得るとは安心したことゆへに聞くと云も心を以て聞くが誡の聞樣、各唯耳に聞たばかりでは所詮がなひぞ。人の言を聞くとは阿彌陀如來の御言なり、善導大師の二河譬の御文に「西岸上有人喚言、汝一心正念直來我能護汝」と有る御言、是を御開山は「西岸上有人喚言者、阿彌

陀如來誓願也」と仰せられ、又「聞佛願生起本末無有疑心」と仰せられた、されば如實の聞信と云ふは、若不生者で間違さぬの御勅命を聞て疑なく信ずるのぢや。依て信心とは疑のなき心、是を大經には、疑惑不信不了佛智に對して明信佛智と說き玉ひ、龍樹菩薩は「疑則華不開信心淸淨者華開則見佛」との玉ひ、天親菩薩は「世尊我一心」と云ひ、繼師は「信佛因緣願生淨土」との玉ふ、道綽禪師は淳一相續とて、三不三信を明し、善導大師は無有疑心と云ひ、源信和尙は一心稱念と云ひ、源空聖人は以信能入と云ひ、吾祖は信心爲本と立て玉ふ、されば信とは疑はれたこと、其疑晴れたも己が力に非ず全く願力の働ぢや。然るに此信とたのむと別物のやうに思ふ同行があるが、よう聞かしやれ御開山は佛智の不思議をたのむとも、不思議の佛智を信ずるとも仰せられ、蓮如樣

は助け玉へとたのむとも助け玉へと信ずるとも仰せられ、たのむと信ずるとを同樣に御用ひなされてあれば、たのむが卽ち信、信ずるが卽ちたのむこと、只音でよむと訓でよむとの違で意味は少も違ひはなひ。然に昔より信は唯疑はれることにてたのむことではなひ、疑はれた其上にたのむ思がなければならぬなどゝ云ふ人達が有る、かゝる人達は元來たのむと云ふは、信の字の和訓なることを知らぬから大な間違が出來るぞ、信とたのむとが別なるときは、一宗の基とし玉へる御本書が不十分になる、我祖は唯信の一で無上涅槃の御證を開くぞと御敎化なし下された。然るに信とたのむと義別なるときは、御本書には彌陀をたのむ御言がなひことになり、實に不十分なものとなる各誤りてはいけませぬぞ。信心とは淨土へ往生させやうの勅命を本眞にうけたが信心、其本眞になられたは向の間違さぬ

まことが凡夫の胸に通たのぢや。助け玉へとたのむは助けてやらふの御誠が聞へたの、其まことの聞へた受け心が信ドたの、その信ずるのが御助けに疑はれたの、其疑はれたがまかされたの、そのまかされたのがすがりたの、そこで蓮如様は信心と云へる二字をは、まことのこゝろとよめるなり、まことのこゝろと云ふは行者のわろき自力のこゝろにてはたすからず、如來の他力のよきこゝろにてたすかるがゆへに、まことのこゝろとはまうすなりと仰る、ゆへに己がはからひ露ちり程も雜へず、御助け候へと信順歸命の一念に、過去未來現在の三世の業障一時に罪きへて、惡性も蛇蝎も正定聚の位に住し、彌勒菩薩に等ひとはめて下さるゝ、是れ毒蛇惡龍と謗られた身が、他力の信が得られたら善男善女とほめらるゝ。此味を御和讃に「善導大師證をこひ定散二心をひるがへし、貪瞋二河の譬喩を說き弘願の信心守護せしむ」さあ是が二河白道の御喩ぢやぞ。貪瞋二河とは瞋恚煩惱の火の河やら、貪欲煩惱の水の河やら、をしひの水やら憎の火やら、涙は逆巻く火は燃へ上る、是れ我々が胸の内、腹が立出せば底知れず欲の心も底知れず、とても渡ることならぬ大な河、何時が起り初めやら何時が打止になるのやら、本も末も分らぬ此淺間敷心の眞中に、濶さ四五寸の道とは至て細ひ道、是はをしやはしやの煩惱の中に、ほそ〳〵喜ぶ信心に御喩へ、されば貪欲の水は來て道を濕し、瞋恚の火はもゑ通しに道を燒く、もゆる炎と渦巻く波の其中に、見へつかくれつたよ〳〵としたごんな信心では行れまひがの心配やめよ、西岸上のあなたから汝一心正念にして直に來れ我よく汝を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ、瞋恚の火はもへてもやかしはせぬ、貪欲の波に逆巻てもぬらしはせぬ、ぬ